統一

第二百一號

法華信仰の中心を確立せよ　顯本法華宗監督布教師　能仁事一師

國の權威と宗教の權威　日宗大學講師　文學士　小林一郎君

理想と現實　高等工業學校講師　中島德藏君

教祖の人格　文學士　滿井信太郎君

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治四十四年三月十五日發行（毎月一回十五日）
第一卷第百二號

（東京　三島印刷株式會社印刷）

日蓮上人云く

外典三千餘卷は政道の相違せるに依て代は濁ると明す、内典五千七千餘卷は、佛法の僻見に依て、代濁るべしとあかされて候、今の代は外典にも相違し、内典にも違背せるかのゆへに、この大科一國に起つて已に亡國とならむとし候歟、不便不便（太田女房抄 一二七五）

（十月五日淺草慶印寺に於ける講演也　中原通麿筆記）

法華信仰の中心を確立せよ

監督布教師　能仁事一師

今回宗門の御用を帶びまして、西は京都大阪、及び岐阜より、北は北海道まで、十三區を巡廻することゝなり、此東京では淺草と品川とに、二回の講話を開くことになつたのであります、東京の中央で田舍者が話をするといふのも妙なので、これが信仰談であるからやれるのであります、私の地方では、岡山のおぢさんといはれますが、今東京へ來れば、田舍のおぢさんと呼ばれる樣になつて、宗門の御用とはいふものゝ、何だか田舍者が此東京へ出て、お話するのは變な感もありまず、が然し信仰のことですから其信ずる所を披瀝したならば、亦何物か御參考になるだらうと思ひまして、本日は私が實際感じたこと、即ち實感と所信とを述べて其責をふさぐ考へであります、

先づ信仰に就いて一言すれば、全體信仰は何人にも出來易い樣に言ひ、又考へるのでありますが、涅槃經の中には、信仰が有つても道理を辨へる所の解了が無ければ、信心しても却つて無明の闇迷に歸するといつてある、されば實際信仰あり、智力あり、理性に富んで物の道理に順應すべき信仰でなければ、何等の力なく、光なきものとなつてしまふので、餘程この信仰といふことは大切な事であります、

從來の信仰如何を觀察するに、多く智力を輕視し、單に信仰のみを重んずる傾向があつた、又一方には之れと反して、僅かの智力を恃み、非常に之を尊重すると同時に、信仰を蔑り、輕しめる思想もあつた、所謂增上慢の徒、邪見の輩で、曩に世人をして慄然たらしめたる社會主義者の如きその好適例であります、然し私は、斯かる極端な說は全然取らないので、所謂智力と信仰と相俟つて調整せられたる圓滿なる信仰を主張するものであります、日蓮聖人の信仰は即ち是れであります、涅槃經に、信解圓通して正に行ふ是れ信仰の本となるとある、如何に信仰を求めても、信と解との

二方面が完全に統まらなければ、その信たるや病的信仰となり、活動なき信仰となる、法華經は實に能く此意義が現はれて居る、今私が特に法華信仰と題する所以亦此に存するのであります、換言すれば信仰と智恵と別に並び存するにあらずして、一つに統まつたものでなければ法華信仰とはいへない、此二つが圓滿に調和されて合掌禮拜の所作とも形はれなければならぬ、斯く法華信仰は信解の兩面を統一せられたものであるから、此二は不可離の關係を有するものであります、而して本日はその中心に就いて、尤も力を注いでお話しする考へなので、他は殆んど添へものとして話したいと思ひます、

私等が近來各縣を巡廻するに、法華宗といふよりも日蓮主義といつた方が頭腦の確かな者が集る傾向がある樣に思はれる、これは其中心が表はれて居るからでせう、又昨年岐阜縣下を巡廻した時に、其地方に組織されて居る青年會や、在鄉軍人會等から出た人々に種々の話を聞きましたが、其等團體の中心たるものが、地方の改善を計り、道德の輓回を叫び、又軍人たるの志氣を發揮せしむべく力めて居るもの、即ち其團體や會合の基礎中心を確立せるものは、漸く發展し、益々盛會に趣いて居る、之れに反して假令一個の團體にしても其中心を失却せるものは、一向盛にならない、否遂に衰亡に歸するのであります、何事に就いても之と同じく中心を確立することは極めて必要な事であります、進んで一國家の上より考察しても然である、若し國家の中心がなかつたならば、假令一定の土地を有し山あり川あり、人家あるも、唯だ一の集合體を形成せるに過ぎない、精神的には何等國家の意義をなして居ない、されば眞に國家の發展宣揚を顧慮せんもの、須く其基礎たる信仰の中心を確立すべきであります、

今日佛教を信ずる人、研究する人が漸く多くなり、地方に於て兒童の教鞭を執りつゝある學校の先生が、寺院及び宗教を大切にせよと教へる樣になつた、社會教育、兒童教育の上にも宗教的意味を加へて來たのは宗教が教育を補ふに與りて力あることを認める樣になつたからであります、又神社などへ生徒を伴隨て、神を拜ませる所もある、或地方に於ては、村長に神官の如き衣裳を着けさせて、それを拜ませる、是等は凡べて敬神思想を養成する爲であるとの事ですが、然し、斯んなに唯何の理も解らぬ兒童に無闇に禮拜せしむることの是非如何は疑問であります、兎に角、近來宗教の必要を認めて來た事は明かなる事實であります、進んで實際宗教の必要を意識して來れば、此に其中心を確立すべき必要が起つて來る、若し其中心的基礎を無視し、沒却して、是非不關、頭を下げさす事は、或は餘りに可い事ではない樣に思はれるのであります、全體私は、是非善惡の撰擇もなく、何でも彼でもペコペコ頭を下げる所の、所謂迎合主義の如き、信仰上に於て尤も排斥であります、迎合主義的信仰は、既に信仰の中心が滅却されたるもので、極めて卑むべき薄弱なる信仰であります、日蓮主義卽ち聖人の教や信仰は確かに中心根底が定まつて居て、其全面を一貫して居る、されば苟も聖人を信ずる者は、少くとも其教、其信仰は如何なるものであつたか、といふ事を味識して、而して眞に意義ある信仰を捧げなければならぬ、勿論本堂へ參詣すれば本尊が最も大切である位な事は、私が言ふ迄もなく、誰人も御承知のことでせう、所が本尊に對する人の祈、卽ち本尊に向つて合掌する人の主觀には種々ある、多くの人は個人的の祈に走つて居る傾きがある、之れは不可、こんな小さな祈のみではいけない、といつて、では品がわるいからといふので、宇宙法界といふ樣な大きな祈りのみで、吾人は滿足するかといへば決して然でない、於此乎、日蓮聖人は國家を中心とした教を宣布されたのであります、

近來國家中心の宗教、皇室中心の宗教でなくてはならぬ、等と叫ばれるやうになりましたのは、喜ふべき現象でありまして、日蓮聖人は遠く六百年の昔に於て既に唱導せられし所であります、此大主義が、幾百星霜の間、潛まれて居たが、漸く現代に至つて各學校等に於ても、鑽仰せられ、研究せられるやうになりましたのは、其峻烈なる教と信仰との要求に因ることと思

ひます、實に日蓮聖人の教や信仰は、國家と其消長興廢を同うするの大覺悟より出でたるもので、其光輝は、小にしては個人より家庭、進んで社會國家に及ぼし、大にしては世界の人類を照さんとの大抱負を有して居るのであります、而して國家中心の統一點を認め、秩序整然たる大なる教であります、

斯くの如く、聖人の信仰は常に國に對する考へが伴つて居る、吾人の信仰も亦其中心を確立すべきや言ふを俟たざる所であります、

或極端なる論者は、二種々大きな會が起つた爲めか、近來大分弛みが來て一向折伏もやらなくなつた、と言つて居る、然し決してさうではない、否大に折伏を行うつゝあるので、大きな會が組織されて、其中心を確立する事は、即ち大なる折伏であらうと思ふ、全體、物事に當つて屈從を生ずるのは、確乎不拔の中心根底が缺けて居るからであります、多くの法華宗徒に其信仰如何を問へば、殆んど一定して居ない、直ちに屈從する、信仰が動搖せられる、是等は凡べて佛の大慈悲、法華經の力を眞に意識し信得して居ないからであります、即ち確かに法華信仰の中心點を捉へて居ないことに因由するのであります、

釋尊一代の經說、素より廣漠なりと雖も、法華經の尊きことは既に經文に明かであります、然し乍ら、如何に尊き經典とはいへ、單に經を讀むのみでは、到底佛陀の大慈悲を味ふことは出來ない、私の固く信じて居ることは、法華經は先づ佛の大慈悲が、充分心の中に合點せられて寫つて來なければならぬ、實際に佛陀の大慈悲に感じ、歡悅隨喜の餘り泣く程眞面目にして、始めて活ける信仰、眞の信仰を得た人と言ふべきであります、之れに就て極めて卑近な適切な譚がある、或處に一人の放蕩息子があつた、書物も少からず讀んで居るし、智識も相當有るが、何分品行が惡くて、或は詐僞を働く、人を毆打する、有ゆる放蕩を盡す、といふ體たらくで、實に始末につかぬ、兩親の嘆息は言ふ迄もなく、親戚の人々も大に之を憂ひ嘆き、遂に親族會議を開いて、彼を準禁治產にしやうと議つた、其時

一人の友人が、此事實を彼に陰かに告げた、放蕩息子は、自分が家督相續が出來なくなる場合であるから、嘸驚くだらうと思ひの外、私かに思ふには、ヨシもう一度金錢を强請してやらうといふので、自家の裏手に廻つて其事情を窺つて居た、內には親族の者が集まつて種々議した結果、立派に相續すべき一人の息子を、準禁治產にするといふ文書を認めて、捺印するばかりに成つて居る、老父は佛壇の下から印を持ち來つて將に捺印せんとした、時に傍に居た老母が、翁の手を捉へて捺印を拒絕した、翁が强いて捺さんとする手を離さず泣いて曰ふには、私と夫婦になつてから既に五十年、今回のやうな出來事は未だ嘗て無い……此に於て老父も亦印形を納めて、さめ〳〵と泣き出した、そして曰ふには、ア、自分の息子とならば椀一つでゝも共に働き度い、假令乞食をしてもかまわぬ、自分は斯う決心した……親族の者は大に怒つて遂に歸つてしまつた、時に陰かに窺つて居た放蕩息子は、從來の惡戲放蕩、有ゆる罪咎不孝を慚愧して、嗟、實に濟まなかつた、自分は今日迄、親の恩の斯く迄も厚く、其愛の斯く迄も深きことを識らなかつた、何故、早く親に事へて心配をかけない樣に、而して孝行を爲なかつたであらうか、あゝ實にすまなかつた、と自分で自分を責め、大に悔悟して、以後は眞に意義ある人生を送らうと奮起したのは、既に年三十の時であつた、

此一話柄は或書に見へて居るものでありますが、法華信仰の人々は、彼放蕩息子が大に悔悟し、大に覺醒して眞人に立ち還つた精神のそれの如く、眞に自覺の精神がなくてはならぬ、法華宗は古來理屈も言つた、然し苟も本佛の大慈悲に光被し、法華經の力を有する信者として、聖日蓮の教へと信仰とを渴仰し、世に活動せんとする者は、我は本佛の愛子なりといふ、大自覺を有し、實感に訴へて意義ある信仰を捧げなければならぬ、此覺悟なき、精神の腐敗せる、有耶無耶の信仰は、實際世上に光を與へ、貢獻することは出來ない、須く法華信仰の本心に立ち返つて、身を以て法華經の意義を體讀すべきであります、日蓮聖人の所謂「本心

と申すは法華經を信ずる也」の言は即ち此間の消息を道破せられたるものと思ふ、されは法華經を信するもの、眞に佛陀の實在を意識して、信仰の中心を確立せねばならぬ、

現代の思想は過度期にある、理屈の時代は既に過き將に實行の時代に移らんとして居る、法華經は理屈にあらずして、實行するにあるのであります、あはれ關東法華と謗はれし法華の盛なる地方に於ける信者にして、單に理論に走せ、或は無意義に合掌禮拜をなすが如きは、眞の法華の信仰とは言へない、法華經を信し妙法を唱へ、合掌禮拜の所作を行ずるとは、本佛を認め、本佛の御前に於て始めて出來得べき事であります、斯の信仰でなければ稍やともすれば動搖せられるのであります、

之に就て、常に心に入れて置きたいのは、佛教の中には大小權實本迹等の別があり、又彌勒の出現を說き、十方の佛を說いてある、然し一人出家多人利益といつて、一人の本佛が衆生利益の爲めに種々に身を現せられたに過ぎない、其所說の法も亦歸する所は一である、只多人衆生を利益せん爲めであつたのであります、故に日蓮聖人は十方に二佛なく、其所說に二法なきことを大觀せられて法華經を信し、本佛を渴仰せられたのであります、此事は法華宗の信者として常に忘れてはならぬ一事であります、佛法の廣博、敎理の幽遠、殆んど盡す能はざる樣に見えますが、之を一貫して觀る時は凡べて法華經に於て統一結歸を示されてあります、

その法華經の中に於ても、亦壽量品の有り難い事は法華宗の信徒としては知らない方はないでせう、而して私は此品の尊いと、有り難い事は、先づ第一に、既に題號に於て現はれて居ると思ひます、即ち如來の二字にある、殊に如の字も有難いが尙ほ來の字に尤も意義が能く顯はれて居ると思ふ、來とは來應の義で、彼の成田の不動の動かぬといふのと正反對であります、來り應ずるといふ、即ち吾人の信仰が至誠至意、渴仰の念に溢れて居る時には、佛は直ちに其信仰に應じて

來り給ふのであります、之れが來の字の意義であります、基督敎や念佛宗でも之れに似たことを申しますが、彼等と大に其意義を異にする所であります、今此來の字は活ける佛陀、偉大なる力ある佛陀が來應し給ふのであります、

然るに此本佛を忘れて、稻荷で御座れ、何で御座れ、一向かまはず拜むといふのは、此の如來の意義を識らないからであります、吾人は、彼放蕩息子が改心して立派な人となつて、孝行を盡したやうな精神を以て、眞の佛子として信仰を捧げ、佛の來應を仰がなければならぬ、如何に不自惜身命の經を讀み、之れを知るとも、其れが事實に體現せられなければ何の役にも立たない、

一體經文といふものは、佛の大慈悲が現はれたもので、其敎法の結歸は法華經にある、即ち法華經は一切敎法の中心統一を說かれたもので、壽量品はまた其神髓である、從ら、其中に顯はれたる佛陀が即ち眞の本佛であります、於此乎、十方三世の諸佛も凡べて壽量品所顯の本佛の應用化現に外ならない、吾人は此本佛の大慈悲の光に照されて、意義ある人生を完うせねばならぬ、苟も法華經を信ずるものは、斯の信仰を有し確乎たる中心點を認めて、法華信仰の狀態は斯うである來て見よ、斯うならねばならぬ、と人に示す程に實際に表現せねばならないと思ふ、即ち題目の響きある法華信仰の家庭は、常に平和の悅び滿ち、日蓮聖人の所謂、女房と酒打ち飮んで何の不足がある底の意義を實現し、進んで國家に對しては大義名分を明かにし、天子と父とを比較して忠孝何れに從ふべきか抔の惑ある、となく、明かに其中心が確立せねばならぬ、日蓮聖人は、開目抄に於ても亦能く此間の消息を示されて居る、斯くの如く、家庭に於ては平和の悅びとなり國家に對しては忠君愛國の思想となり、其間一系紊れざる秩序整しき信仰でなければ不可、

近來、婦人は婦人としての會、男子は男子としての會、其他種々樣々な會が出來て來ましたが、其等の會に怠つて出ないのも懈怠誘法と謂つて、誘法罪の一つ

で、不成佛の一因となる、故に信仰の現はれとしては是等に至る迄及んで來なければならない、今の政治家教育家、何々、といふ樣な具合に小區別しなくとも、法華の信仰だに得れば、親には孝、君には忠、衆に對しては同情親切、其他有ゆる方面に實際に發揮せられて始めて信仰が活現したと言ひ得られるのであります、然るに未だ人の製た護符を貼りつけて御本尊を知らない、日蓮聖人の木像を知り乍ら本尊の穢れたのを氣付かない樣では、到底駄目であります、

實際信仰程都合の好い便利なものはないと思ふ、日蓮聖人が、今生には祈りとなり、旅には錢となり、橋となり、牛馬となり、臨終には燈となるといふことをいはれて居りますが、信仰は何物に對しても應ずべき力を有つて居る、勿論日常生活の上にも順應するのであります、今日多くの人が生活難といふことを申しますが、然し贅澤難はあつても生活難といふことはない筈であります、生活難があるとすれば、汗は平生の不心得から來る結果と思ふ、但し實行難といふことは確かに在る、そして此實行難を脱出して自由になるには日蓮聖人の如く、仰ぐ所は釋迦牟尼佛、信ずる所は法華經といふ確然たる信仰に在る、全體經を讀むこと、理屈を叩くことは易いが、それを事實の上に行ふことは極めて困難であります、世間の人が、法華宗の婦人は年老れば鬼子母神樣になるといふことをよく言ひますが、之れは年老るに從つて鬼子母神のやうに恐くなるといふ意味であつて、佛を信じて居ながら、年老るに隨て鬼子母神の子が無くなつて鬼母となつては大變なことであります、然し眞實に法華の信仰を得た人は決してそんなことはない、否凡ての點に於て他に優秀な所がなくてはならぬ、然うでなくては信仰が事實に現はれたもの、活ける眞の信仰とは云へない、

私の鄉國の嚴樣は、能の面が好きで、其面を有つて居られます、其中で翁と媼との面があつて、翁の面の方が媼の面よりも皺が多い、然し何となく翁の面は顏が優しくて媼の方は何處となく恐い所が自然と形はれて居る、これも矢張り其性格が顯はれて居ると思ふ、

法華宗の信徒は唯經を讀み太鼓を叩いて題目を唱へる計りでは、眞の信者とは言へない、其信仰が精神を修養し、事實に發して來なければならない、而して常に實在の活ける佛陀の大慈悲に感奮すべきであります、或學者は、立派な者でなければ本尊の御前に出る事は出來ないと言ひますが、私は、如何に卑賤の者でも佛前に向はねばならぬと思ふ、本尊に向はなければ眞の信仰に入り、自覺の本心を發揮することは出來ない、日蓮聖人が信仰を種々なものに譬へられた如く、如何なる者にも信仰は必要であつて、假令、薄德の者と雖も大なる自覺を以て眞に信仰を得たならば、其信は道の源となり功德の母となるものであります、

天下には隨分學者も多い、法華經を信ずる人も多い、祖師を崇拜する人も多い、然しそれが表面の信仰、外觀のみの崇拜であつて、實際生活の上に何等の響きもなく、刺激もないものならば、一向不必要ものであります、其信仰が人事百般に及び、而も輕重本末を誤らず、秩序整然たる活動とならねばならない、日蓮聖人の信仰の顯現は其處にある、國家に對する時は熱烈なる愛國者となり、又同時に個人に對して極めて情深き心意が表はれて居る、乙御前御書に、法華經の爲ならば、假令餓死しても苦くない、若し餓死するやうな事があるならば我が許へ來り給へ、「共に餓死し候はん」とまで申されて、同じく道を求め行する人に同情されて居ります、吾人も亦斯かる信仰があり、實行が出來るならば、鬼に金棒であります、

次に信仰が、人格の上に及ぼすことを一言しやうと思ふ、凡そ信仰は、小は小なりにエライ人即ち完全なる人格を作るものであります、假令、得意の時、順境に在るの時のみ浮き〳〵して、失意の時、逆境に陷つた時には、意氣消沈するといふやうなことはない、例へば、誰某は先日迄、金時計、金縁眼鏡、金指環に自動車で以て意氣揚々として居たが、急に今淋しげに、悲觀的に陷つて居る、樣子を聞けば散々相場で失敗したのであるといふやうな事だが、眞に信仰を意識して居るものは、常に高潔なる精神と實行力とを有して、

一時の苦樂に自己の神身を動搖せられない、強いて流行神を信じて利己的物質的一時的欲望を追求することを爲さない、常恒不斷、眞面目に自己を欺かず、人生を呪はず其本務を怠らない、假令山崩るとも、波寄せ來るとも自若として確信の基礎に立つて動かない、斯の精神の修養は卽ち信仰にある、信仰は確かに偉大なる人格を成るべき要素卽ち「信は道の源、功德の母」となるのであります、

先づ吾人が、法華信仰、日蓮主義の信仰よりして、眞に滿足を得るのは、佛陀の中心は何にあるかを識り得た時にある、此より勇猛精進の心を起し、佛陀の大慈悲に接觸することを得るのであります、然るに原不の祈禱が有り難い、中山の御利益を蒙つたと騷いで居るやうでは未だ壽量品の意を知らないもの、即ち如來に不の字を附して不如來と讀んで居る者といはざるを得ない、如來の意味が如何に尊く、如何に難有いかを識つたならば決してそんな事はない、日蓮聖人が開目抄の中に『一切經の中に此壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんが如し』と仰せられてあるのは、卽ち法華信仰の中心點を示されたのであります、唯だ上の方のみ在つて下がないといふやうな病的信仰は、斷じて法華信仰でない、少くとも佛陀の說き敎へられた全面を一貫して、確乎たる中心を捉へ來つて、力ある光ある信仰を確立せなければならない、孔子が『天、德を予に生せり、桓魋其れ予を如何』(論語) 卽ち、孔子が宋に在りし時、宋の司馬桓魋が私怨を以て孔子を害せんとした、其時孔子の弟子が夫子に向つて早く去り玉へと言ふに答られた語でありまして、天は既に賦生するに、斯の如き德を以てする時は則ち桓魋も予を如何にすることが出來やうか、一個人の私怨を以て、天理に背反て人を害することは出來得べきものではあるまいといつて、自己の信仰を述べて居る、卽ち合理的信仰は私人的人欲の如何とも爲し得べからざる所であります、日蓮聖人の信仰も亦素より自己の利益のみを計るといふやうな精神は毫も無い、勿論法の爲め、國の爲め、衆生の爲めに不惜身命の信仰を捧げて居られたのであります、故に如何なる迫害困難に遭遇するとも、それに信仰を動かされることはない、否一難來る毎に、迫害に値ふ度に、彌々信仰は深くなつて、其度毎に直ちに活ける佛陀の大慈悲に感激して常に其恩寵に住して居られたのであります、

要するに法華信仰の者は、能く壽量品の意義を味ひ本佛の大慈悲を渴仰し、其中心を確立して、人生に活き、光を與へ、自己の本願を完うすべきであります、されば先づ本尊の雜亂を排して、法華經に現はれた、卽ち日蓮聖人が光顯せられた本尊を以て信仰の中心を確立し、經は壽量品、行門には題目を唱へるといふ事にして、實際それが凡べての事に活現せられて、人格に於ても、實行に於ても、何物にも亞ぐざらん程に至らなければならないと思ふのであります、

日蓮上人曰く(遺文 五九九頁)
仰ぐ所は釋迦佛。
信ずる所は法華經なり。

國の權威と宗敎の權威

(十月十四日九段偕行社に於ける天晴會例會講演の大意也文責在記者(三上生))

文學士 小林一郎君

茲に揭げました問題は、私共の學力に依つて解決致しまする事は困難でありまするが、何とか結着が付いて何かの材料になりますれば本望の次第であります、

私は此夏日蓮宗大學の學生に伴れられて九州に參りましたが、京都方面を廻りて居りました時、本願寺遠忌の事に就て感じた事がある、それは本願寺が宗祖の祭りを致しまするに、飾りになる人を伴れて來て儀式を飾ると云ふことを見ました、則ち夫れが爲に或る有力なる御方が參らんので、午後一時の法要が午後六時になつたと云ふ事である、いま之が可否は問ふのではないが、國家の何かの力を籍りて自分の力を擴大せざるべからざるか、自分の敎として自分の力を以て自分の光りを發揮せねばならぬが、他の力に依りて自分の光りを發揮すると云ふならば實に價値のないものでは

ないか、又九州より歸り路に鎌倉の講演會に臨みましたが、海軍少佐の方が參りて質問があつた、それは宗教なるものは國に限られるものであるか、或は世界の凡ての人を救ふべきものとするならば、宗教は其國の政治と關係はないので、宗教家が政治家を動かして其主義を擴張すると云ふのは、夫は本領を沒却したものでないかと云はれたのであるが、是は面白い感じが致しました、則ち一方は國の力を藉りる、一方は國に關係がないと云ふ意味合である、所謂國の何者かゝ歸依した時立派になつたものと思ふのと、宗教は國境のないもので宗教と政治とは異つたものと云ふ考へ方である、而しながら日本の皇室を中心として居る國體に於て、宗教が國と關係が遠いならばそれは成立が出來ぬとおもふ、何の宗旨にても國の繁昌を計りて居る樣であるが、何れも二ッの思想があつて奪合つて居るかの樣に思はる、私は之に贊同を表しない、

私は日蓮上人の主義を信じて居る者である、國の權威に屈するも、別の領分に陣取りをするのも、共に間違つて居ると思ふ、それは二者融合して活動する者でなければならぬ、日蓮上人が王法佛法の冥合と云ひ、守護國家論を述作して國家と宗教との融合を說き、又立正安國論に於て卓越せる識見を發表せられ、而して入滅の時安國論を講じられたのは特に注意すべき點である、而らば王佛の關係が如何に冥合するか、之に就ては今自分の心の白狀をして見やうと思ふ、

一體現代に於ては、千百の問題が起つて居るが、何れも表面上形式だけであるから、永久に解決を見ることが出來ない、例へば通佛教と云ふ語が流行る、能く人は通佛教にして頂きたいと云ふが、通佛教と云ふ佛教は釋尊の教である、此の教を說くに當りて好加減に相互にブッカルことを避ける、何つも同じ事を云ふて居らねばならぬ、又昨今基督教が統一せねばならぬと云ふ事を叫んで居るが、各派の條件の項目が面白い、それは基督教各派を統一し、神を信ずべき事と云ふのであるが、神は如何なる神を信ずるかゝ解つて居らんので、故に解決をするのではなくして未解決にするもの

のと謂ふべきである、是は今の時代の通弊であるが、凡てが其うなつて居るかと思はれる、所謂妥協と云ふ事は排斥すべきことである、私は今の危險思想に就ても反對にドシ〳〵其意見を聽て、而して之を防止する設備を布いた方が宜かろうと思ふ、我々上人の下に集まるものは意見の異なる點は、ドシ〳〵ブシッケテ見て意義を味ねばならぬ、前述の問題の如きも宗教が國の權威と關係がないものと信じて居るならば、充分に其主張を發揮して見れば宜いが、好加減に融合するは不可である、日本の思想界は二心あるものを排斥すべきであつて、若しこの物が解決さるゝ場合は、端と端とシケ合ふて融合するものであるから、現世と未來との問題の如き、相離れたるものゝ樣に思ふて居るものも、之をヂリ〳〵と近付けて行くならば、自分の心を自分で解決して見ることが出來ると思ふ、

凡そ思想は二元論に走りて一元論に歸するものとおもふが、二ッを好加減にせば一元になるものでない、我々が自分を考ふれば、自分は横にも竪にも引張られて居る、而して自分は何うなつて居るか何うなるものかと云ふことを考ふると、上に下に横竪に引張られて無限に關係あるものと云ふ事を知るのである、其適例は言語である、己れは無關係だと云ふ言葉は何千年間の日本人より養はれたるものであつて、亦將來に傳はるものである、夫故に横竪の事情を認めなければならぬ事は勿論である、而るに今の場合にも一派の人の如く、國の境なく神と一致すれば可なりと云ふて竪に安心を定めても、横にも關係ある事を氣付ぬ樣ではいけぬ、自分と云ふ交叉線に於ては凡てに關係ある事を知らねばならぬと思ふ、宗教問題に就ても亦何かの線と交渉あるを知らねばならぬ、而して之を出發して立歸りて考ふれば、國の下に宗教を置くべきか、將た亦交叉點には如何なる力の存するかを見出す事が出來る、古代何れの國でも宗教の趣を具へざるものはない、國と教とは殆んど一所になつて居つた、而し世の複雜に伴れて特別の形を取り、國は國、教は教となる樣に分化したものである、

甲州の笹野の隧道は尤も困難な工事であつたそうで兩方から堀りて行つた、段々進むに從て兩方の人が顏を見る事が出來た時に、荒くれ男が思はず嬉し涙をもつて相互の成効を祝したと云ふ事であるが、それは兩方が同じ目的を以て行つたから泣いたであろう、則ち國家と宗教とは形は異つても趣致相合ふ時が來るとおもふ、人を完全にし樣と云ふ事が、國及宗教の目的なりとするならば、眞實の宗教家政治家が同一の目的を以て進まば、喜ぶべき結果を見る事が出來ると思ふ、然るに今日の宗教家政治家の態度は、何れに走るべきかと逡巡しつゝあるの狀態ではないか、若し宗教家も政治家も同一の目的を懷いて、至難なりとも切々倦まずして進むならば、遂に隧道を開堀し終りて互に會見するとき、感極まることになると思ふ、昔の時代に兩方が一致したと云ふ事は多い、ヘブリンの如きギリシヤの如きはそれである、ギリシヤは國を主としたるも神に祷ると云ふ事があつた、國家と宗教とが一ッの力となつて働いたのである、支那の儒教は宗教として見るならば、天の命を受けて王となるが故に人の爲にすると云ふことになつて居る、世の複雜ならざる時は別々に取扱つては居なかつたが、分化作用によりて國家の主張を絶對に見るのと、宗教を絶對に見ると云ふ思想が起りて來たのであるが、始めに兩面の融化を好加減にやつて居つたから、遂に之が明かなる意識になりて二ッの衝突を來す樣になる、斯く衝突をする處から之を避けたと云ふので、國と教の權威を別けるにいたつたのである、昔しローマに於ては、國の方はローマ王、教の方はローマ法と云ふて居るが、元來兩者を別々にする立場に付ては相當な尤な理屈がある、

第一には宗教は來世の問題を處理し、國家は現世を取扱ふと云ふのであるが、此世をいけぬと云ふものが何うして來世がよからうか、現世未來の區別は何時分つべきか、此世に何等の痛痒を感じないものが彼世に制裁を加へらるゝ事もおかしい、此世を此世として見彼世を彼世として見るならば——甚だ無意味ではないか、

第二には物質的と非物質的とに區別して、國家は形の上に人間に制裁を加ふるが、宗教は之に反對であると云ふて居る、之も同じ事である、二ッに分けることは科學の進歩に伴ふて理義が立たぬ、現代の思想は物質非物質の境を取るまでになつて居る、一元的に進んで居る、故に之は頗る固息であると思ふ、

第三には國は團體により成立し宗教は個人のものであると云ふのであるが、是も同じ事で、一人が社會を離れて存在することは出來ぬ、個人としてもと云ふてもそこに何等かの關係がある、全然單なる個人としては存在が出來ぬ、個人を圍めるものを離れて個人の安心を得られ樣筈がない、

第四には國家の制裁は強制的で宗教の制裁は教示的であると云ふが、其國家の制裁が強ければ、世に現存することが出來ぬと云ふ說も何等の價値がない、

第五には國家は人間の意思實行に伴ふもの、宗教は感情に屬すと云ふて居るが、生きた人間が感情のみ働いて意思の實行を止めると云ふ事は愚論である、亦宗教上の信仰が樂を興へ——面白味を感じて實行を促がすものならば、宗教の眞味はない活動寫眞の如しである、行爲の上に於て感情上愉快を感せざるものは根本的の意義がない、

或人は國の權威を感ずる時は日本人なるも、宗教は世界的なるが故に國家は認めずと說くものもあるが、吾人は世界の人と云ふものを認めない、日本人として日本人たることが出來ないならば、世界の人となることは六ヶ敷いとおもふ、世界の人と云ふ抽象的の人はあつても、日本を離れて世界的に何をすることが出來るかと云へば何も出來ない、日本の玄關を出發せずして世界の道を歩むと云ふ理屈は見出されない、此國を離れて世界的の人と云ふものは、一の概念にして實際的でない、

要するに、宗教と國家とを別々にする論者は、宗教を骨董の如く國家を裝達吏の如く考ふるものである、國は宗教を作つたらよいと云ひ、又宗教は自己の力を延す爲に國の下に居ると云ふのは、何れも正鵠を得た

者でない、現今政府の當局が、宗教を藉りて風俗を矯正し樣として居るが、是則ち宗教利用論者であつて國の下に置いて居る、講釋師を利用して風俗改良を行ると同じ樣に宗教を使ふのは失敗であると思ふ、宗教が國家の下にある場合は、一切の活動を左右せらるゝは勿論、其尊敬せらるべきものを下して使ふて居れば意味が無い樣になりはせぬか、延いて以て國家の威嚴が淺くなりはせぬか、深き意味を卑くして使ふのは不可ぬ、そう云ふ結果は僞善者を作ることになりはせないか、國の威嚴の下に膝を屈する宗教は僞善を作ることになると考へる、

また國家が宗教の下に屈したる場合に就ては、天皇樣が三寶の奴と云つたのを、國學者が國を蹂躙せられたと云つて居るが、それがために宗教が昌へたと云ふことは出來ぬ、形の上に屈したのであるが如きも、實は宗教の權威を下したと云はねばならぬ、彼のローマなぞには、國の權力が宗教の下になつたと云ふ樣ではあるが、それは國を昌へ樣とする政略方針よりかゝる形式を取りたのである、何れにしても皆間違て居ると おもふ、然らば之を如何にせばよかろうか、則ち國と宗教とが融合し互に一ッになると云ふ目的の前に進めば宜い、國ゝ教とは多くのものを纏めるに在る、商業軍事美術等が國に依て統一せられて居ると云ふ事は知つて居るが、宗教を專門家の所有の如く思ふは誤りである、國は形式の上より統一するのであるが、宗教は個々の精神を纏めて來るものと思はねばならぬ、又商業軍事等皆國家を離れて發揮されざるものであるは勿論、この國と宗教とは互に融合されねばならぬとおもふ、國には役人がある宗教に僧侶がある、官吏を難有思ふが僧侶には敬意を持つて居ない、國民が政府を監督する樣に宗教を監督せねばならぬ、在來の僧侶は橫着であるが之は國民が惡い、宗教の力を認めずして之を輕視し特別扱にして居つた、而し教は宗旨の宗教でない、

國は何の爲に存立して居るか、國は人の完全を期するの目的を以て存在して居るものと思ふ、廣い意味を

以て言はゞ、人其者の幸福を計る爲に國の力が働き、其力を徹底して屈せしむるにあるならば宗教的の意味に於て働かねばならぬ、又宗教は此の人間の幸福を進め、其教の力は一人を安心せしむるのみならず、之に背くものは嚴密に制裁を加ふる迄に到るべきである、國の目的を論ずる上に於て同一になり、何處より立脚しても結び合ふ樣にならなければいけぬ、而して其國家は何んな國家かと云へば、温かき情を以て心と心との結合の意味あるものが最上である、血と熱とが通つて居る國を求むれば相互の住んで居る我國である、歐羅巴人と競爭しても勝てぬが、或一派の如く過去の歷史を尊重し保持することに於て誇るに足るのは勿論、血が通ふて居る點に於ては世界に冠たるべきであると おもふ、斯かる我國には宗教が尤も大事である、而し何等の詮議を遂げずして宗教の名に依て採用するのはいけぬ、其宗教は現實の世を捨てず未來に偏せず、非物質的心靈的を貫いて居るものでなければならぬ、之は法華經の教が尤も適切なるものと おもふ、我國と融合すべき法華經の意義は日蓮に依りて日本國の有無はあるべしと云ふ、靈化して一になると云ふ事に解釋が出來る、上人の教が七百年前に出ても現代の我々に教へたものと思はねばならぬ、上人は一面は非國家なるが如きも、國の權威を認めながら宗教の權威を發揮されて居るのであります、故に上人の主張に對しては活きた教として宣傳に努め、政治の方面よりは温情を以て國民を指導するならば、其處に圓滿なる融合が出來るとおもふ、世には國と國とが對立した場合に於て、それは夢の如しと思ふ人もあるが、實現し得るものと思はゞ實現し得らるゝものである、私の前に酒屋があります、鑑藻の半天を着た人が二錢だけ燒酎を買に來たが、妻君は賣れないと斷つた、再三交渉の結果遂々買はずに出て行つた、此男は酒を飲まなければ生きて居られぬ、二錢を持て餘して一夜を送つたであろう、今の世は妻君の態度ではあるまいか、亦求めても得られないのではないか、多くの場合はこの狀態ではあるまいか、人は青年の風氣が墮落したと云ふが、我々の

住んで居る團體の青年である、危險なる思想を懷いて無謀の擧を敢てするものがあるが、矢張我々の團體の人である、我々は之に對して何等の責任を持たぬであろうか、我々は上人の敎に依り根本的に救治することが現下の緊要事であると信ずるのであります

日蓮上人云く

早く邪法邪敎を捨てゝ實法實敎に歸すべし、若し御用ゐなくんば今世には國を亡ぼし身を失ひ、後生には必ず那落に墮すべし、速に一處に集つて談合を遂げ評議せしめ給へ。

理想と現實

（十月二十九日神田帝國敎育會壇上に於ける禪香會（秋季講演會の講演大意也文責記者に在り（三上生））

東洋大學講師　中島德藏君

私は日蓮の宗門に就ては門外漢でありますが、而し宗敎には同情を持つて居りまする、故に日蓮の遺書を讀み亦說敎を聞いた事がある、それから本多僧正より敎書などを拜借して少しは讀んで見た、門外の我々の考へは內容の詳細は解らぬけれども、上人の上人たる事を知ることは出來るとおもふ、夫故に理想と現實との關係を述べて上人の現代に意味ある事を申し上げる積りである、

私の見まする所に依れば、上人の現代に意味ある所以は、一は奮鬪的性質である、そこで理想と現實と云ふことは、現代に於て種々の方面に澤山紹介せられて居るが、我々の人生は理想と現實のかね合で、人間の生活を中心として考へれば、生きて居る我々の望みの今の有樣と後とのかね合である、則ち只今は貧乏人で

ある生活に困る、病氣で身體がきかぬ智惠が少ない、現代今と云ふことを考ふれば足らぬ勝である、足らぬ勝なる貧乏が續き病氣が治らず、智惠が進まぬものとすれば誰れも生きては居らぬ、絕對的に望みがないならば死んで終ふ、が我々が理想を持ちまして、今は貧乏であつても後には困らぬやうになる、病に苦んでも健康を回復する、智惠が足らんでも磨けば進むと云ふので修養をする、而うして自分は之に達することが出來るだらうと理想を樂みとして、足らぬ勝なる世の中に疲れたる自分に鞭打つて根氣を出して行く、パンの爲にも、智惠の爲にも、信仰の爲にも、理想があつて戰ふことが出來る、充分の力を入れて戰つて行く其處に人間の命がある、モウ之で滿足したと云ふ事になると急に年を老ッてひよろ〳〵になつて了ふ、貧乏、困難之れと戰ふて行く間は人間の命が續くものである、弱虫の人か金が出來ると病氣になる、夫婦共稼のものは健康になる、金が出來て呑氣にして居ると病氣に罹りて加ふるに家に悶着が起る、貧乏子澤山となれば夫婦共稼の間に結構世を送れる、將來に望みを持て稼ぐ、望みの爲ならばいかに苦しいことがあつても戰ふ、其れは奮鬪である、悟りの開けない人は少し苦しみがあると泣いて奮鬪する、火事で燒け出されたから本所に移つたら水難に遭ふた、金を銀行に預けて置いたが銀行は破產をして終つた、今までは立派な生活をして居たのが何も無くなつた、天何ぞ無情なると女房や隣家までへも泣いて行く、涙を流しながら仕事をする、是は眞の悟の開けぬものである、

上人は流罪は辛いことであるが、其困難苦みの間に樂しい難有いと感じた、而して理想を持つて苦んで當られるから倍々命がある、碌でもない人間は幾らかの財產があると飲め食ひ歌ひと云ふて、豚や犬にもやれることをやつて、愉快な樂しいと云つて居る、そんなことは豚や犬にも出來る、豚犬の親類として生きるなら格別だが、人間の命は苦勞奮鬪鞭打ちつゝ永らえて行かねばならぬ、一疋の豚が何千年生きたつて人生には意義がない、豚でも食ふから生きて居るので之が

潰しと云ふのである、こう云ふ生き方は舊幕時代より習となつたので、奮闘せざるものを極樂の樣に考へ込むものがある、兎角世間に事なかれと云ふて奮闘を忌み嫌ふものが多い、それは働くものを彼の年になつて何の困果であろう可愛想になどと云ふ、こう云ふ事は召使或は主人の關係に澤山ある、宗教家や學者が豚の尻にくッついて、木葉理屈を列べた人もある、山田長政の樣な人が出てもやりきれないから、家康がヤットして居るのが宜いのだと命じたので、儒教や宗教徒が其樣に說き廻つて人民も丸められて無事々々と云ふ、されば今の世にも、普通の人は金を少し貯めて寢食ひ左團扇と云ふものもあるが、今迄の日本の理想になつた豚的犬的であつては、現代の日本は立ち行かぬ、然し少しは悟りかけて人間らしい望みを立てゝ、如何なる辛苦艱難をも厭はず、正しき望みの爲に辛苦することが樂しい難有樣な人間にならなければならぬ樣になつた、苦勞が樂しいと云ふのが眞理である、豚や犬的の個人でも生きて居られては迷惑である、列國對峙の現代には奮闘自らが愉快なりと感ずるものでなくては生きて居ては困る、清國革命がある、伊土戰爭がある、寢食ひ左團扇の人には用がない、日蓮上人の奮闘は現代の眞理として認めらるゝは當然の事である、昔しギリシヤの盛な時も、奮闘を樂む時は昌えて居つたが、ペルシヤと大戰爭をした時世界を我家なりと思ふて、寢食しながら奮闘の氣が止まつたので亡びた、ローマは戰をすることに精を出した時は盛んであつて、一時に世界の富を集めた、桃太郎の話にある樣に、金を積んだ車が幾臺銀が何臺と、ぞろ〳〵現ナマを引込んだ、ローマ人は之を配分して貰つたから贅澤の限りを盡した、其一例を言ふと、一日の仕事は、風呂場を拵らへて多くの美人に身體を磨かせる、湯から上ると美人が團扇であほいで香水をふりまく、夜は大夜會を開いて酒池肉林の樂みをした、ローマ人は自分で働いて食ふものはない、それから滑稽な話しは、或人が節儉をしなければならぬと云ふて自分の死んだ後の葬式費を決めたが、マア節儉をして十二三萬圓位にして貰ひたと云ふた人があると云ふ事である、大抵の人は湯に這入ると奮闘性がなくなるもので、三時間も五時間も這入つて居れば大抵ボンヤリ御めでたくなつて了ふ、御めでたい〳〵と云ふて亡びたのである、我國でも錢のない青年が風呂屋で流しをとる、體裁が惡いと云ふのであらうがそれは亡國の徵であると思ふ、

ロシア人は小屋の中で濁酒を飲んで端唄でも歌つて喜んで居たのだが、ピーター大帝が奮闘主義で大革新をやつた皇后も國民も皆之に反對をした、子息が抗議を申込んだので殺した、皇后も同意しないので殺して仕舞つた、それから極東に手を伸ばして來たのであるが、中途日本の厄介になつた譯である、英國の先祖は海の人である、英の國神として祭るものは海賊である始め海賊が陸に上りて奪つて居ると、追剝をやると云ふて喧嘩をして二人が川の中に落ちた、それからそれを祭つて居る、米國のエマーソンは英人をしやも的國民なりと云ふて居るが、何んな事があつてもヒケを取らない、世に辛苦多くあれと祈るので、旅をする時にも途中で汽車が脫線する樣に、船に乘る時は大西洋の海中に難破する樣にと、而して其困難に際し智恵も勢力も出ると云ふのである、英人の傳を見ると、現ビクトリア女皇の御婆さんに當る人が、獨逸より還るとき貧乏であつて旅費がなかつた、漸く親族より借り受けて、ケント伯爵は自分が車を引て海邊まで行くと云ふ境遇であつた、彼程の國家の元首でそう云ふ事があつた、斯く苦勞の中に奮闘したので一世を風靡したのである、又獨逸のフレデリック大王は、貧乏であつて御子供衆にも一汁一菜であつた、是れも考へ樣であつて三度のものは二度にすると云ふのが宜い場合がある、近頃流行の胃病の如きは二食主義を取ると癒る、安すくて時間もかゝらぬ、誰れでも飽食暖衣逸居して爲すなきは禽獸に等しと孟子も言つて居るが、窮々せば立派な精神が出て來る、そこの意味が理想と現實との關係に在る、其處で日蓮は其精神實行に於て、自分から行はれて法難其ものが難有いと感じられた、之が尤も現代に處する必要なる事である、立派な人になるには

苦勞が難有いと云ふ事にならなければ二十世紀の優勝人種とはなれぬ、而し意思の弱い人は日蓮上人を信ずることは出來ぬ、將來の宗教でも道德でも奮鬪主義が這入らねばならぬ、

こゝに漠然と理想と云ふも、如何なる理想が可なるかと云ふ事は研究せなければならぬ、一概に奮鬪すると云ふてもしやもになつてはいけぬ、是々の目的を達する爲に奮鬪すると云ふことが大切である、個人も人生も國家も昔しのまゝに居るものでない、段々大きくなつて育つて行くものである、驢を得て蜀を望むもので、千圓の金を得たいと思つた人が千圓を得れば理想でない、美人を得て理想の妻として毎日長火鉢を中にして、相對して顏ばかり見て居つたからとて詰らぬ、夫婦仲良く兩人日に月に新にならなければならぬ、少し宛變る事がなければ一生涯を通ふす事が出來ぬ、夫は夫妻は妻として新らしくなると云ふ事が必要であつて、愛想をつかされない樣にしなければならぬ、それは何時でも同じ樣では愛想が盡さる、子供の可愛のは日に月に生育し、亦學校で一年二年と進むので新になるからである、大人は大きくならぬから理想を持つて日に新にせねばならぬ、人間として生活する爲には理想が大事である、一ッの處に居らぬ此の働きが人生である、働きが止まると無意味になつて仕舞ふ、

更らに現代の要求に應じて必要なる點は、忠君愛國である、凡ての人が心を一にして日本國を尤も鞏固なる立派なる獨立國とせなければならぬ、國際關係の複雜なる時に於ては、一層日本と云ふ意識を明確にして忠君愛國の必要を認めなければならぬ、而して此時代に於て日蓮の貴き所以を知るのである、我々は日本と云ふ國をモット立派にせねばならぬ、日英同盟の關係を離れても他國より不當の要求があつても、差支ないと云ふ迄に修養せねばならぬ、如何に聲のみが盛であつても內容が整ふて居ないならば容易ならんことである、彼のローマが世界的になつて亡びた樣なもので、日露の戰爭は一等國として取扱つて誠に喜ばしい事であるが、そこに喜ばしからざる分子が潛んで居る、何

うしても國民的自覺の上に、家庭の組織、學校保護、宗教運動に就て眞面目に注意する樣にせねばならぬ、

私は上人を二ッの點から讃美したのですが、之を抽象的に考へずに、着實に現代に於て、國を誤らざる樣致したいと考ふのであります、

法華經に云く
汝今信力を出して
忍善の中に住せよ

教祖の人格

（豐橋市顯本青年會に於ける講演にして公平なる側面的觀察は以て日蓮讃仰者の好資料たり依て同會々長國友文學士に乞ふて掲載することゝ爲しぬ　三上生）

文學士　滿井信太郎君

最初に御斷りして置きたいのは私は日蓮宗のものでは御座いません、獨り法華經の信者でないばかりか未だ一切の宗教に救はれて居らぬもので御座います、この點から見て私と日蓮聖人との間に何の關係もないので御座います

又私の生れたのは房州で御座いまして南と北と村こそ違へ、教祖聖人の生國を同じうして居るので、此點から見れば、聖人と私との間には少からぬ關係因緣があるので御座います、乃ち聖人と私との間は、この兩方面から見まして不即不離の關係にあるので、一體物の正當なる解釋をするには、所謂「つかずはなれず」の關係にあるのが最も便利な地位であつて、この點から見て、私の如きは聖人の御人格なり御事業なりを批評するに最も適當な位置にあるものと思はれます、勿論聖人の御人格は、天日の如く高く廣い、それを凡眼のものから仰ぐので、下世話に所謂「よしのづいから天

井」の嫌は免れ得ぬので御座いますが、兎に角、自分の地位が便利であるといふ點から多少の勇猛心を奮起しまして、今日この演壇に立つた次第で御座います

で私の演題は「教祖の人格」と云ふので、こゝに教祖と申したのは、當日蓮宗の祖師と云ふ積ではなく、一宗一教の開山全體を指したもので、つまり、苟も一宗一教を開く人には必ず共通の人格と云ふものがある、その人格が具備しないと、いかにその云ふ事が立派でも、その行が正しくても、一派一宗を立てると云ふ事は出來ないと云ふ事を論じて見たい考で御座います、則日蓮聖人を直接に批評するのでなく、これを側面から觀察すると云ふ方法を取ので御座います、でこの演題の樣な事を考へつきました動機と申しますのは、今から七八年前我思想界に大亂が起りました際、我こそ佛陀なり使命者なり、我こそ何宗の開祖なりと聲を大にして教壇上にその主義をとき、新聞雜誌にその教義を論じた、所謂自稱教祖の輩出した事が御座います、その澤山の自稱教祖が僅か六七年を經た今日吾として名は聞えなくなり、その主義を奉するものは一人もない、然るに佛陀と云ひクリストと云ひ、日蓮と云ひ或は二千年或は六七百年昔の人が、今尙多數信者を有し深く人心を支配して居るのは何故であるか、勿論その教義に深淺の差があるのでもあるが、その主なる理由は實に教祖その人の人格の如何によるのであらうと思ふ、かう考へて日頃多少研究もし先輩の說も聞きまして、總ての教祖には共通の人格がある事を知り得たので、今日はこれを演說の主題とし、日蓮聖人の御人格を側面から窺つて見たいと云ふ考へで御座います、然らばその教祖共通の人格とは何か

一　明敏なる頭腦

である、衆愚の是とする所を非とし、凡俗の正とする所を邪とし、色に欺かれず、聲に迷はされず、先入主と云ふものを排して直に人世を達觀すると云ふ大知識大識見を要するのであります

これを御教祖の場合にして申上ますと、當時、戰亂が引つゞいた後で、加ふるに天變地異が頻りに起つた爲めに、世間無常と云ふ感じが一般士民の心を支配して、佛教が甚だ盛に行はれたので御座います、その佛教の中で、上武士の間に榮えたのは禪宗、下萬民の中に信仰せられたのは念佛宗であつた樣に思はれます、この時勢に生れた日蓮は、天台の徒弟として淸澄に居られた、齒甫めて十四五歲の頃、既に從來佛教に疑を

抱き、長じて諸宗を研究して益々法華經の價値を認め諸宗を批判しては法相を下に居て上を破る將門純友の徒と罵り、三論を臣にして大王に順せんとするものなりと誹り、眞言は一向に大妄語云々と賤しみ、念佛を罵倒して「親をころして子を用ゐる主を殺せる所從のしかも位に即けるが如し」と極論して居られます、彼の有名な四個格言もたゞ徒らに他宗を惡口して自ら快しとしたものではない、聖人が明敏なる頭腦には佛法の邪正が淨玻璃鏡にかけた如くあざやかにうつつて、佛法王法の爲め座して傍觀するに忍びなかつたのであらうと思ふので御座います

二、大慈悲心

明敏なる頭腦をもつたものは、動もすると批評的になり易い、白眼以て世を見ると云ふ冷淡に陷りたがるのであります、しかし總て宗教の開祖には、この快刀亂麻を絕つ底の明敏なる頭腦を有する上に、燃ゆるが如き愛の心大慈悲の心が備つて居るのであります、日蓮聖人が

「我も亦これ世の父諸の苦患を救ふものなり」

と說かれ

「今この三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり而も此の處は諸の苦患多し唯我れ一人のみ能く救ひ護ることをなす」

と仰せられたのも一に大慈大悲の御心から出た御言葉であります、「我も亦これ世の父」「衆生は悉く吾子」と云はれた、父と云ひ子と云ふのは、決して比喩に用ゐた御言葉ではない、眞實心に子を思ふ心を以て一切衆生に對されたのであります、親の愛程淸い深い强いものは決してない、繼親がいかに學問がありいかに志の厚いものでも、いざと云ふ時誠の親の心と同じにはとてもなる事は出來ない、處が日蓮聖人は勿論苟も一宗一教の開祖と云はれる人になると、一切衆生は悉くその子であるので御座います、親がその一人子を慈むのと全く同じ心を以て衆生を愛するので御座います、そこで

三　自　信

と云ふものが起ります、こゝに自信と云ふに二つの別がある

(一)吾說是なりとの自信

(二)吾は大導師なりとの自信

日蓮聖人が、「日本國に是れを知れるもの但日蓮一人なり」と云はれたのは、(一)の自信に屬し、「日蓮は日本

の大難「拂ひ國を持つべき日本國の柱なり」と說かれたのは（二）の自信で御座います、この中殊に注意すべきは、この（二）の自信で、（一）の自信だけならば匹夫匹婦も尙且これを有する場合があります

一體人は自ら危險に陷らぬ限りは親切を盡したいと云ふのが人情の常で、從つて自分の考が正しいと思へばその說を發表して、世を利し人を益さうとするのが當然の道理で御座います、而かし自說を發表する爲めに危難が身に迫ると云ふ樣な場合には、餘程立派な人格の人でも、動もすると自說の發表を見合せると云ふ事になり易いので、これを三つにわけて考へて見ると、下品のものは（イ）心ならずも世間の俗說に降服するので、餘程人格の高い人でも、（ロ）愚を裝ひ狂と佯り山にのがれ獨り身を潔くすると云ふ位が關の山で、（ハ）危險を恐れず權勢に屈せず身を棄てゝさまよへるものを救ふと云ふ行動をとられるのは、衆生を吾子とする大慈悲心あるものでなくてはとても行ふ事が出來ないのであります、そこで、この吾は世の救主、國の柱との大自信を實行する場合には、當然世間の反對を受る自分が子として救ふべき衆生は一時擧りて敵となり來るのであります、その結果總ての敎祖は必ず幾多の苦難に遭遇せらるゝのが普通で、クリストが十字架の露と消えたのも、孔子が世に用ゐられなかつたのも、我日蓮が、或は小松原に或は龍口に或は佐渡に、幾多の苦患を嘗められたのも全くこれに外ならないので御座います、則、敎祖に御難はつきものである、して見ると之れに對していかなる態度を取られて居るかと云ふと消極的には

四、忍辱心

積極的には

五、大勇猛心

となつて顯れるのであります、クリストが右の頰をうたれたを左の頰を出せと說かれたのも、忍辱の敎に外ならないので、宗祖が一生の歷史はこのぢつと堪へる忍辱の歷史であると云ふも過言ではないので御座います、而し忍辱は消極的方面で、身を全うし心の潔白を持することは出來ますが、敎祖の一大使命たる敎を弘め道を拓くことは出來ません、そこで積極的方面、則ち大勇猛心を要するので、苟も一宗一派の宗祖、多少共にこの勇猛心を抱いて奮鬪せぬものはありません、就中、日蓮聖人は、言はゞ大勇猛心の權化とも云ふべき御方で、此點が世間から動もすれば誤解せらるゝ原因になるので御座います、日蓮及日蓮宗が世間に誤解せられたのは、既に日蓮御在世の時以來の事で、或は平地に波瀾を起して名を賣らんとするものであるとか、或は時の權勢に刀を向けて聞えを取らんとする政事家であるとか、甚しきは日蓮を以て賣僧であるとさへ罵しる位であります、玆に宗敎には局外である私が、公平無私の立場から考へて見ますと、日蓮を以て平地に波瀾を起すものとしたのは、取りも直さず評者自身の無智無識をあらはしたもので、例へて言はゞ、こゝに一人の男が大聲を上げて往來を怒鳴つて走り行く、人は彼を目して狂人である白痴であるとするかも知れぬが、而し耳を澄まして聞くとスリバンの音が聞える、近火だと知れると、さきに往來を叫喚て走つた人は狂人でも白痴でもない、火事を知つて驅け付けた人だと解る、日蓮の耳には世人の聞えぬ半鐘の音が響いて居た、世をこのまゝにしては佛法王法共に滅する亡法亡國の急鐘が其の明敏な頭腦に響いて居たればこそ、大音あげて怒鳴つて走つて居たので、凡俗の聾いたる耳にはこの急鐘が聞えなかつた、さればこそ、平地に波瀾を起すの、名を立つる爲のさかしをなどとの惡評を立てたのである、聖人を政事家と評する輩は、日蓮が當時政事の中心たる北條氏を敵とし、其宗敎が國家的にして常に日本國を對的としたる二つの點より誤解したるもので、日蓮を賣僧と蔑ずむ一派は、坊主が惡けりや袈裟迄の譬に洩れず、鷺と烏と言ひくるめんとしたのであります、賣僧說の根據のない事は勿論こゝに云ふ必要はありませんが、順序として論じて見ますると、當時の他宗の僧侶と日蓮聖人とを比較致しますれば

鎌倉中の持齋の僧を御供養候事は、但牛を飼せ給ふにこそ候へと申したりしかば、日蓮房は鎌倉殿を牛飼と申し候と讒奏するに依つて云云

念佛者は惡口をなし、眞言師は色を失ひ、天台ぞ勝るべきよしをのゝしる、在家の者共は、聞ふる阿彌陀佛の敵よとのゝしり、さはぎひゃくこと雲動雷電の如し、日蓮は暫くさはがせて後、各々しづまらせ給へ、法門の爲めにこそ御渡りあるらめ、惡口等よしなし云々

とある、波木井抄星下抄の文を引證して、三百代言の如き他宗の僧、在家の匹夫匹婦と選ぶ所なき念佛眞言等の法師と比較して、人格上雲泥の差ある事を示せば充分であると考へますが、尙ほ一ッ別方面から日蓮

の人格の高いことを說明しますと、總ての大人格には人の肺腑を貫いて其心の奥の琴線に觸れる言葉がある之は言はゞ大人格の投影であつて、唯だ才があるとか文章が上手だとか云ふだけでは、到底大人格なりと云ふ事は出來ないので御座います、クリストが山上の垂訓ソロモンの榮華の極みもと云はれた言葉や、孔子がゆくものはかくの如し云云の句の如きは、決して人格の低さものは口にし筆にする事が出來ぬ者でありますが、其所謂名文と云ふものゝ中には、大人格の投影である名言が少くないので御座います、此點から見て日蓮がたゞ政事的才能に富みたる策略家でもなく、況して賣僧などとは似ても似つかぬ御方であつた事を知る事が出來ます、風大なれば波大なり、龍大なれば雲たけき譬で、日蓮が大山師の如く見える所は、則ち彼が大勇猛心の勝れた點で、この大勇猛心を以て一大獅子吼をなし所謂

諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一閻浮提に弘ゑらせ給ふべき瑞相に日蓮さきがけしたり、若爲其二陣三陣續さて、迦葉阿難にも勝れ、天台傳敎にも超よかし、わづかの小島の主等がをどさんををぢては閻魔王のせめをばいかんすべき

の勢で、鎌倉武士を敵とし諸宗の僧を敵とし、衆愚を敵として王法の爲に奮鬪せられたのでありますが、この外に今一ッ敎祖の歷史に必ず附隨する事實がありまする、それは

六、奇　蹟

ミラクルで御座いまして、たゞに五百年千年と極古の人のみではなく、新しく一派を開いた人、例へば黑住敎の開祖と云ふ樣な人にも、必ず奇蹟と云ふものが御座います、我々はこの奇蹟を其儘に信用する事は出來ません、で是れに對して種々の解釋が非信者の間に行はれて居りまして、或は人の心を取り入れる爲に手品を使ふのであるとか、或は御有難連が後から製造したものであるとか云ふ事を申す人もありますが、是等はあまり同情なき解釋で取るに足らん說であろうと思はれる、而して我々の之に對する考へは、敎祖の人格の强くして高い爲に、自から斯かる不可思議な信仰を起さしむるのと、今一つは、信者として其敎祖を仰ぐところ、自から敎祖を人間以上のものと崇敬するに至ると云ふ二つの原因に依るので、つまり敎祖其人の人格が、通常人の企て及ぶ可らざる强さと大さとを持つ

て居らるゝのが、奇蹟を信ぜしむる大原動力になつて居ると思ふであります、

以上論じ來りました通り、一宗一派の敎祖と仰がるゝ方は、何れも明かなる智惠と深き慈悲心とを具有し消極的には忍辱の心强く、積極的には大勇猛心を奮起して、敎のため道のため奮鬪せられたので、敎祖日蓮聖人は、素より之等の諸德を具備せられ、殊に智惠の明かであらせられたこと、大勇猛心の勝られた點では、三國に其比を見る事皆無であると云つても强ち過言ではあるまいと思ひます

佛は人天の主一切衆生の父母なり、而かも開導の師なり乃至釋迦佛獨り主師親の三義をかね給へり

と新壽抄に云はれたことは、其儘取つて敎祖其人を說明した言葉とすることが出來ると思はれます房州の俗謠に「私しや房州荒海そだちさんまの干物の出る所」と云ふ歌がありますが、風荒れた磯の夕にこの歌を聽くと、荒波高き太平洋の濱に一葉の扁舟を浮べ、妻子の爲めに風波と奮鬪する漁夫が、赤銅色の腕に艪づかを握る姿を見る心地が致されます、妻子のために風波を恐れぬ漁夫、其の漁夫の心を百千萬倍したもの、之れやがて日蓮聖人の御心ではありますまいか

今日御集りの方に御願がある、將來日本に繁昌すべき宗敎は、少くとも、活動的にして國家的のものでなければならぬ、この點で、日蓮主義は最も望みの多い宗敎であります、從つて其信者の方々が、本門寺の御會式に向ふ鉢卷で繰り出す的の活動でなく、敎の爲道の爲に活動し、病人の側で團扇大鼓を叩く樣な信仰でない、眞の信仰に依りて安心立命の境地に達せられんことを希望致します、斯の如き信仰によりて大奮鬪せられたならば、一天四海皆歸妙法の素願が達せらるゝこと、決して遠き未來ではないと確信致して居るので御座います

日蓮上人云く

うゑて食をねがひ、渴して水をしたふがごとく、戀しき人を見たきが如く、病に藥をたのむが如くみめかたち好人べにしろいものをつくるが如く、法華經には信心をいたさせ給へ、さなくしては後悔あるべし後悔あるべし

國民的運動の教報

東京天晴會

◎隨喜功德品には『何かに況んや一心に聽き說き讀誦し而も大衆に於て人の爲に分別し說の如く修行せんをや』と說かれてあつて我熱誠なる會員は內に細密なる研鑽の道を進み外には隨力宣傳の聖事を行ひ心にも身にも大主義を體讀しつゝあるが我大聖の大理想がいかに現代の要求に適格なるかは天下の識者が嘉然として會席に列するのである壯觀を呈するに依つて之を知るべきである十月十四日第三十一例會を九段阪上階行社樓上に開かれた定刻松本幹事開會を宣するや松森權曹正は『日蓮聖人と佐渡』と題して地理上より歷史上より佐渡の優美にして光輝ある方面を紹介しさらに開顯せられたる王佛冥合の靈地として各部面より詳細に論述し本化の活躍狀態を說いて偉大なる聖人に渴仰を捧げられ小林文學士は『國家の權威と宗教の權威』と云ふ大論題を掲げて登壇し縱橫の快辯を振つて本誌に掲げたる要領の卓說を披瀝せられた例に依りて晩餐の食卓準備成るや相對して相語り合ふ談話は何れも上人の主義と國家と人生と個人との交涉などに關する各自の所見感想であつて傾聽に値せざるものはない而して幹事より新入會員として紹介せられしは

海軍少將　中村由太郎君
海軍少將　松本　有信君
海軍少將　岩崎　達人君
會社員　中山　長明君
會社員　田部　直三君

の五氏で會員一同は拍手して歡迎の意を表し共に大法研鑽の同志が可驚熱誠を以て集り來るのを悅び上人の靈格が每自の大活動をせられつゝあるかを心讀したのである食堂を閉ぢて後談話室には日蓮主義に關する萬丈の氣燄が昂つて居つた　（白碧生）

地明會

◎聖訓に『男は羽の如く女は身の如し』と仰せられ女性の價値がいかに力あるかを認められたので男子が其職分に忠實なるのも事業に努力するのも內女性の心懸けに依りて愉快に行動の出來るものであるされば男子の修養に伴ふて女性も亦之を補くるだけの修養をして置かれはならぬ世の中には女性の研鑽的會合が効果がないと評する一輩もあるがそれは井底の蛙見であつて時代の大勢を知らざるものである決して女性の修養を輕視してはならぬ我聖訓には女性の地位を尊重して婦人らしき格を養ひ上ぐべきを教へて居る而かもこれ日蓮主義の特長である日蓮主義に依らざれば眞實に婦人の本性格を發揮することは出來ぬ十月二十二日午後一時より赤坂區青山安川邸に第四例會を開いた定刻に至るや本多大曹正は大本尊の實前に於て醍醐の法味を捧げて國運發展の加護を請ひたる後小林文學士は人生問題より說き起し處世上の方針を指示し進んで人間以上の一段の力を把住し一家全體の教育者として覺悟を要すべきを述べ上人の聖訓を引いて之を立證して壇を下るや曹正野口日主師は涙の日蓮上人と題し冒頭涙の內容を說き古來の英傑が勇氣に時れだるが如きも其反面には優しき涙の流へたるを歷史的に論證し上人の一生の活動は涙である血である熱である而かも其涙は一面智力に意志に融合せられたる情的涙であるを說いて多くの遺文を引いて情の上人を紹介し婦人はこの優しき上人の靈格に接觸して婦德を養ふべきを勸めて講を結びしが會員は何れも熱心に傾聽し隨喜の念充ち滿ちて鑽仰の熱度を高むるものがあつた講演が終ると茶菓の饗應があつて閉會したのは午後五時半であつた　（白碧生）

第一義會

◎十月一日午後一時より例會講演を開いた新池御書には『小善なれども法華經には供養しまいらせ給ひぬれば功德無量なり』と示されてあつて日蓮主義は信仰の發現に依る一小善事たりとも皆是れ深き感化と功德を具ふるものにして則ち法華經に供養すると同一の意義なりと開顯するものである故に一回の講演を開いて佛陀の教說を傳ふることが法華經に供養しまいらせることになるので我徒は此の聖訓を體讀して常に精進の行に勵んで居る笹川眞應師は宗教信仰の生活に在るものは永久不滅の生命を得たるものなりとして各方面より之を論證し山根曹正は法悅歡喜の境涯に住するものは人生最大の幸福を得たるものなりとの序論より平易の因緣譬喻を引いて眞摯なる妙法蓮華經の功德を說き所以を說き日蓮主義のいとも尊ばなることを宣べて多大の法益を蒙れ散會したのは午後五時過であつた　（白碧生）

妙教婦人會

◎立正安國論に『但し人の心は時に隨て移り物の性は境に依つて改まる』と仰せられてあるがげに萬古朽ちざる格言である境遇は人の性格に影響を與ふること至大の關係を持つて居る其人の生活境遇が單純なる物的のみで他に高等なる趣味がないならば不安失望の淵に沈んで人生に快味を持つことが出來ない而しどうしても人は宗教的に活きて根底ある基礎よりいでて人の生活舞臺に働くものでなければ最善の慰安と無限の滿足を得ることは出來ない本會は婦人が家庭に在りて妻として母として子としての心得が宗教的基礎を築き上げたる上に於て立働くべく教示するのが其事業の一であつて亦之が日蓮主義の特長であるさればこの主義の下に集まる女性はいかに幸福なることであらう思へばさらに一段感恩の念を強めて信仰の實を現はさればなるまい十月十六日午後一時より例會を開いて佛恩報恩の修行を勤め笹川曹都は因果の法則より說き起して信仰の功德に及び佛果の圓滿を論じ本多大曹正は知目行足の經文を題意として人間思想の缺點を指摘し實行の足らざるを慨き法華の信仰に住するものは智惠識見透明にして誤ることなく赤法の如く實行するを得べき所以を詳論し婦人の愚痴多きを論して信仰に生命を得よと誘へ聽衆の肺腑を衝くものがあつた此日幹事吉田珍雄氏の母堂銚子刀自の逝去を悼み本多大曹正大導師として會員と共に佛果莊嚴の加被を請ひ一同の讀經唱題の汚れなき信仰の聲は感應の益を得たことであらう尙ほ吉田氏よりの供養を一同に頂ち悅びに充ちて各歸途に就かれた　（白碧生）

國明會

◎十月八日午後一時より第八例會を淺草區吉野町本部に開く會するものは婦人のみであつたがみな信仰に活きんとする勇氣と希望とを持つて居るので何となく愉快らしく見える當日は丁度會場寺院の御會式であつたので三上本誌記者は會式を行ふ所以より說き起して上人の一代を心得ざる可らずとて小湊降誕より清澄山の修行を述べ十有六年の研鑽遊學の辛苦を說き鎌倉名越に小庵を構いて辻說法より伊豆の伊東に小松原に龍の口に佐渡ヶ島に艱難迫害に遭ひ給ふても大慈悲の活動は己むことのうして個人に團體に國家に向つて覺醒を促がすこと急なるものであつた上人六十一年の生涯は極めて短かきが如きも今尙ほ吾人の眼前に在りて信仰を導き人々の向上的進路を示したまふこと靈眼を開けば親しく大人格に接觸するを得べしと論じ上人の高德に感謝を捧げて信仰を勵むは此上もなき名譽なりと結び一時間半の講說にも倦むものなく謹聽して居つた　（白碧生）

親善會

◎十月二十日同會にては御會式を利用して講演會を開いたので參詣者は例會よりも多數であつた鈴木會長は法貴ければ人貴く人貴ければ處貴しとの聖句より說き起して日蓮主義に於ける王佛冥合の關係に及び上人の大理想を紹介して日蓮主義の貴き所を知らしめ山根曹正は人道と佛道と云へる講題の下に人道の意義を說明し儒教に天下の達道と稱して人倫五常を說き天下の達德と云ふて智仁勇と談するも之を貫くもの一の至誠にして智仁勇は今の學術にて智情意と稱し之を圓滿に發達せしむれば完全人格となるべきを述べ最後に吾人と佛陀との關係を說いて日蓮主義の信仰を勸められたので今迄何氣なく世を送りて居つたものも不信の夢は醒めて信仰に志ざさんとする善男女をあるを見うけた　（白碧生）

法國會

◎十月二十日午後七時より日本橋茅場公園柳娛亭に於て例會を開いた關田養叔師が圓滿なる信仰と題して人法關係より說き起して吾人と佛陀との父子的因緣を論じ一音唱題のそこに一切無量の功德を含むものなりとて日蓮主義の圓滿信仰を詳說せられたので聽衆の多くは土地柄として現ナマ主義者なるも自己精神の靈府に警いて宗教信仰の道を歩むべきを悟るものあるを見うけた歪し斯會の有志が倦まずして進むならば大なる發展を見るのは勿論教化の實績を擧げることが亦大なるものであろうと思ふ　（白碧生）

德教青年會

◎同會は主任關田養叔師の自邸に於て開會するので毎月二回とも午後七時より實業家の子弟のために修養講話するので十月一日は克己の修養に就て歴史上の英傑が修養したる克己の實例を擧げて之に努むべきを論じ同月十五日は家庭の宗教と題して日蓮上人が家庭に示せる諸種の教訓を說明して懇切なる教によらされば家庭の平和は期し難しとて上人の宗教が最も適切なる理義を明し一面國民道德の實行を促がし一面宗教信仰の缺くべからざるを敎へて德教的青年養成に努めて居るが効果は多大なるものであろう　（白翠生）

養德兒童會

◎同會は生れて僅か四ヶ月に過ぎないがこの社會的教育の設備がいかに現代に必要であるかは敢て筆を勞するまでもない而し事實に於て斯かる會を設けて各階級の家庭の兒童を集めて簡單なる娯樂のうちに漸次高等なる趣味を與へ樣とするのは實に至難なる教育事業である而してまたこの趣味を持つならば斯かる事業ほど望みと面白味のあるものはない殊に寺院にこの種の事業には適當の靈地である境内が廣く建物が大きいから兒童を遊ばせるには尤もよい同會の十月例會は笠川師と山根師が昔へ話の面白いのを一二節話して快感を與へ餘興や菓子などをも理分して何とのう氣持よく午日を送り夕陽西に春く頃喧々然として唱歌を謳へつゝ各進かき家庭に歸つたさりと

ていかに清き集りではないか　（白翠生）

◎雜誌日蓮主幹能仁事一師は東京及東海道一圓に於ける教勢を視察し併せて講演調査の目的にて上京せられたれば十月五日淺草田甫慶印寺に於て日蓮主義大講演會を開いた能仁師は首導師として令法久住國運榮昌の祈りを捧げ午後一時半關田布教師は日蓮上人の信仰に就いて懇ろに教示し能仁僧正は本誌に掲載せるが如く流暢の快辯を振て信仰の中心たる百五十餘名の聽衆をして日蓮主義の純正なる信仰を啓發するものがあつた翌六日品川町妙國寺に於て開會したが同地はつれに有益なる講演を開いて修養を積んで居るので比較的正しき信念に住して居る午後一時を報ずるや幹事關會を告げ次で紀野布教師は宗教と實生活との交渉を說き信仰の境涯を述べて不退の信仰を勸め能仁僧正は信仰の對象に就いて祖師を引いて詳細に說明し信仰の統一と本尊の統一問題とは信境冥合の功德を得べきことを論說せられたので百餘名の聽衆はこの心得を以て信行の德を積むべきを覺り法益の悅びに充ちて散會したのが午後五時過であつた（白翠生）

橘香會

◎十月二十九日午後一時より神田會國教育會樓上に於て秋季大講演會を開いた同會は東洋大學在學者の日蓮上人の崇仰の團體であつて毎月一回本多大僧正に請ふて經書の研究をして居るのであるが春秋兩回に亘り公開講演を開て日蓮主義の擴張に努て居る譯である此日聽衆約二百名を算し熊井幹事の開會が終ると日宗大學の講師磯野師が「大なる喜び」と題して上人が辛酸迫害の種に法悅に充る事實上の證明を與へて偉大なる所以を紹介し中島德藏君は本誌に要領を掲載し置たるが如く「理想と現實」に就て莊重にして流暢なる快辯を振はれ蓮村菱男君は「奮鬪の二意義」に就て一時的壓迫的奮鬪の價値なきを說き內的自覺の奮鬪の意義を論じ本多日生師「佛教の統一點」と云へる講題を提げて壇上に現るゝや開口一番日蓮主義は奮鬪的である積極的である旗色鮮明なるものである聽衆として透明を缺ける結論のない議論は日蓮主義でないと叫んで懇ゆるが如き熱誠の態度は先づ聽衆の敬愛を喚び佛陀觀宇宙觀の何れより見るも佛教各宗は法華經の下に統一せらるべき所以を論明し現代思潮の缺陷を指摘して日蓮主義の完備を說示して降壇せられたのは午後六時であつた夫れより來賓一同に別室にて茶菓の饗應などありて隨意散會を告げた　（白翠生）

房總教報

◎靈蹟保存會員房總巡拜團日蓮聖人靈蹟保存會幹部の一行は十月八日先づ第一着に房州保田町吉澄妙本寺の靈寶開拜と日蓮主義の大講演を開催せられたり今其概況を記さば先に此の報に接したる妙本寺に於ては大に此擧を快諾し特に一行の汽船案內として松家惣代晉子僧之助氏を以て前日鑛岸島汽船發者所迄出張せしめたり十月七日午前六時保存會理事小原

少將全輝子令夫人松本吉田兩弁護士伊東茂右衛門氏同會評議員矢野大審院檢事石橋海軍少將安川繁種氏の一行は出迎の經生氏に案內せられて汽船幸祥丸に便乘し同日午前十時半差なく房總保田海岸に着せらる同地歡迎會よりは新調別仕立の幕に國旗を織して早川保田町長以下是れに分乘して一行を本船迄迎ひたり當日妙本寺貫主小原大僧正は山務長外數名の末寺を隨へ海岸に出迎ほれたり又早川町長笠生助役檢家惣代等數十名旗幟を正して海岸通路の兩側に整列して歡迎せり。松本弁護士は一應挨拶を爲し遂て宿所に充てられたる同町松音樓に入り小憩後松本弁護士は一行を紹介し午後一時より歡迎員は一行の旅情を慰めんものとて房北の絶勝鋸山公園に飲茶を催し早川町長先導惣代各員一行に尾し、同中腹の呑海樓に小憩し更に登りて絶頂なる十州一覽臺に至り親しく秋空の絶景を味ひ且つ山內の奇勝を探り夕陽の沒する頃一同歸宿せり此日北條館山兩町の有志歡迎者を代表して中山齋藤の兩師外貳名も同地迄出迎ほられたり

明れば十月八日東天の空明けやらぬ曉の夢を破れる汽笛の音是れぞ先着の一行に加はらんとて來られたる鳩田野口稻田の諸名師赤尾弁護士及び寫眞隊の一行なりき直に松音樓に至り先着の一行と合せらる姉崎博士は當日貳番船にて參加せられたり

一天晴れ渡れる午前九時一行は歡迎車にて妙本寺登山の途に向はる一方妙本寺に於ては此の擧き一行を迎ふべく數日前より附近の檀信徒相集り大門入口には意匠を凝したる大緑門を作り通路には一面に白砂を敷詰めなどして

準備おさ〳〵怠りなし今や一行の歡迎に地せられて妙本寺に近くや烟火轟々冲天に爆發して一行の登山を報じぬかくて一行の大門石段に差しかゝるや隨伴の寫眞隊に依りて凡ての壯觀は撮影せられたり次て滿山に響き渡る大太鼓の音と共に一行は音昇堂着客禮拜を行ひ小原妙本寺貫主の發聲にて一同是れに和し自我偈唱題音吐朗々の內に瀨戸山務長語で御開扉を行ひ奉る是れぞ日蓮聖人等の御肯像にして御入滅に先立つ四ヶ年前即ち弘安貳年御弟子日法聖人に命じて影刻ありしもの薄墨色の御法衣を召され兩の御手には經卷を持せ給ふ日法聖人一刀三禮精神を籠られ給ふ傑作なりとぞ次に錦帳もて須彌壇上に殿飾せられ柄として懸らせ給ふは是れぞ一圓浮提內寇絶無二の大聖人の御眞筆萬年敎護の大本尊なり其文に曰はく『大覺世尊御入滅後經歷二千二百二十餘年雖末月漢日三箇國之間未有此大本尊或知不弘之我慈父以佛智隱留之爲末代殘之後五百歲之時上行菩薩現於世始弘宣之文永十一年太才甲戌十二月日甲寅國波本井郷於山中圖之』と敬ふれば一百の大文字是れ皆末法海墨の現代を救ひ王佛冥合を實現せしめ給はんの御金言なりと拜し奉る滿堂三千の人唯れか此の御靈德に感ぜざるものあらんや夫れより內陣に懸け列れられたる寶の拜觀を終りてやがて歡迎の式に移りぬ先づ同町小學校敎師の奏樂にて女生徒一同は君が代三唱滿場起立最敬禮右終て瀨戸山務長開會を宣するや小原大僧正登壇歡迎の辭を述べられ萬年敎護御本尊に付て說明ありたり次に宿徒惣代川崎氏檀家惣代渡邊氏及保田町長の歡迎文朗讀あり終て小原法華少將閣下には保存會を代表して有樂海軍少將閣下には一行を代表して親しく答辭を述べられ且つ日蓮聖人靈蹟保存の實行を誓はれたり式後同寺書院に於て中餐祝盃を擧げ後一同は大本堂向拜に整列して記念撮影をなせり午後一時より滿堂大場所の中に日蓮主義大講演會は開かれたり大要左の如し

末法弘通の使命　文學博士　姉崎正治君

現代と日蓮主義　弁護士　松本郡太郎君

姉崎博士は碧顏聖祖當年の感想談に始り往年鎌倉へ往返の途次に當れる保田吉澄の汀古の法華堂今の妙本寺御石山の通路には今も巍大聖人の御草鞋の跡を印し給へる眞砂の數々存在せんと實にも因緣深きは房州の地と昔を思ふ感想談より大聖人の偉大なる人格に說き及び最後に余は一宗一派に拘泥せず廣義に於ける世に冠絶せる日蓮大聖人を讃仰し以て世に紹介するものなりと諄々流暢なる結明は滿堂三千の聽者感動せざるもの無かりき引續き松本弁護士王佛冥合論より四質格言に及び立正安國の大義より大聖人の法華色讀の大偉德は現代國民教育の模範たるべしとの結論にて又靈蹟保存に就て責任ある講演滔々懸河の快辯もて大に感動を與へられ午後四時半閉會當日は特に勝山分署長代理早川部長長同所駐在巡査來會周到なる注意に依り雜踏を防ぎ得たるは大に謝する所なり

十月八日保田町吉澄妙本寺の靈蹟拜觀を終りたる同園は北條町有志者の懇請により野口醫正松本赤尾兩弁護士は同町旅館吉野庵に休憩後講演會々場たる同町法性寺に向ふ同夜會場入口には大アーチを作り荘飾電氣を配置し大

國旗を交叉し以て一行を迎ひたり午後六時より名士の講演を聞かんものと來集するもの續るが如く忽ちにして場外に溢るゝの盛況を呈したりき恰も當夜は日曜日の事として同所中學高等女學校小學校の教職員及諸役所等の地方名望の士多く來臨せり午後六時より發起人高橋正男君は開會の辭を述べ續て左の三師の熱誠なる講演ありき

日蓮聖人の忠孝論　弁護士　赤尾藤吉郎君
日蓮主義とは何ぞや　僧正　野口日主師
現代と日蓮主義　弁護士　松本郁太郎君

赤尾弁護士は主師親の三論より說き起し日蓮聖人の忠孝論に及び野口僧正は日蓮主義の佛陀觀人身觀國土觀の下に思切なる講演に滿場靜に傾聽したりき松本弁護士は現代の惡思潮を痛論して四箇格言に及び更に聖祖の人格日蓮主義の本領靈蹟保存の必要に論及して約二時間に亙りて廣長舌を振はるゝや滿場靜で傾聽し時針は既に十二時を報ずるも一人の退場者なく蓋し北條町に於ける空前の盛事なりき閉會後各講師弁士と發起人一同は吉野庵樓上に於て交誼天明會支部組織の契約を成シて退出せり

翌九日は前日詣山町に投宿せる小原少將の一行北條町に上陸の予定なりしが朝來降雨の爲め陸路を取り午前十時北條町吉野庵に着し並に講師諸士と合して中食を終られ正午より一行及同地發起者と歡迎會場なる法性寺に於て茶話會を開き發起人齋藤眞雄師は一同を代表して歡迎の辭を述ぶるや小原少將には一行を代表して答辭を述べられ親しく信仰上の圓話ありたり右終て庭前に於て記念撮影を爲し一行は馬車を驅て天津に向へり　（齋藤眞雄投）

天津町に於ては有志の熱誠なる歡迎をうけ一星霜の功なるのぼりて海拔一千貳百尺の清澄山に至るや清澄山の貫主執事及有志は亦周到なる準備を整へて之を迎へ何等教團的の餘見を存するなくこの大偉人產出の靈地たるを名譽とし誇りとして誠意をこめたる優遇に感拜國一同の感謝を表する所にして亦必ず近き將來に於て世界の歷史の上に躍離たる光彩を放つていかに清澄の山が世界に紹介せらるべきかは今に論て之を豫知する事を得る也一行は清澄山に於て聲高らかに自我偈を誦し題目を唱へて上人の遺蹟を仰ぎ本年初夏立正安國主義の下に企てたる紀念塔建設事業の完成を祷り而してこの洋々たる太平洋の水と靜けき四邊の山は雄大なる親字を與へ宗教的靈土に必靈の秘奧を洞いて彌々信仰の固きを增し夫れより靈寶を拜觀し靈土を探り實感に觸れて無限の生命を感受したりと云ふ一行は謝意を表して山を下り天津町を經て小湊に至り誕生寺及有志の熱篤なる待遇を辱ふし靈寶を拜し靈土に觸れ上人が降誕の當年を追想して無量の感慨に打たれたことに上人が宗教的大奮闘のうちにも能く故郷の父母と云ひ經海の孤島に流竄の寒月を眺むる折にも安房の父母と戀慕させたまへしことなどを憶ふては亦そゞろに上人の心事を窺ふて襟を正さゞるを得ざる也

一行は小湊の遥拜を終へて大原驛より歸京せられたりと云ふ

願はくは國を愛し人を思ふ志士はこの大偉人日蓮がいかに國民教育の上に國運發展の上に大威力の存するかを考察し靈蹟保存の聖業を贊せよ日蓮は一宗一流の教團の範師にあらず實に日本帝國の教祖にして亦空前無二の愛國家也教育家也斯かる大偉人に從ふは以て名譽とするに足る也　（白碧生）

◎千葉町大講演會

東京市布教本部主催の下に十月十五日午後一時より千葉縣公開堂に於て講演會を開き其日降雨であつたが廣告等の準備が行届いたので三百の聽衆を見るを得た三上義敎君は現代日蓮主義勃興の大勢を紹介し偉人日蓮の研究は國民の誇りとすべき所以を述べ野口日主師は「國教確立の急務」と題し教の必要缺くべからざるは個人と團體との別なく教を無視したる已人及團體は亡ぶべきものなりとて歷史的に之を證明し現代の思想の危機には國民の歸向する教を確立すべしと說き本多大僧正は「佛教の統一點」と云へる講題を掲げ危險思想の發生動機に就いて各方面の哲學上事實上より之を評し去りて防止の方法に及び宗教の範圍に進んで佛教各宗の危險分子を擧げ最後に法華經の統一主義に結歸すべきものなりとて佛陀觀人生觀の根底を詳論し熱烈の結論は聽衆の肺腑を衝き多大の感動を與へたことゝおもふ閉會を告げたのは午後五時であつたが千葉町の演說としては珍らしいほど人出が多かつた之も現代人が精神上の欲求の已むことを得ない事實で宗教徒が熱誠以て事に當るならば之に滿足を與ふることが出來ることゝ感じたのである　（白碧生）

◎千葉縣下第六回聯合大法會

十月二十九日より三日間に亘り大朝町蓮照寺に於て音樂天童の大儀式を擧げられしが當第六教區に在りては前月來より準備員驛つて萬般の設備に奔走せられしかば諸事整頓を告げ二十九日午後一時二十餘名の僧員は異口同音一實の妙味を捧げて國運の隆昌と大法宣揚の加被を請ひこゝに大法會開會の奉告式を了り各教區より參列の布教師は即是道場の心地に住して信念の啓發に努め聽者をして其護法の熱誠に感ぜしむるほどで夜間は特に小竹布教師の幻燈器によりて上人一代の活動的事蹟を紹介し娛樂のうちに教訓を加ふるものあつて實益の多かつたことは言ふまでもないまた本堂の石段右側に手踊茶番狂言の餘興などありて人山を築くほどの賑ひであつた次で三十日は曉の雨も十時頃には天晴れ渡りて秋の日好となつたので地方の參拜者堂に溢れ境内に群集するの盛觀を呈するに至りしは之れ則ち佛陀顯靈の御力であることゝ感じた午前十一時二十分汽車の着するや各教區代表僧員支學林生從大鋼師教總人會員はプラットホームに本多管長閣下を迎ふ一發の煙火は天に響き閣下は徐々腕車によりて會場に着せられた午後二時號鐘の合圖により四十餘名の僧員は何れも正裝を調へ到曉たる音樂の響きは人心の汚れをはらひ可愛の天童は盆栽の如き手に香ばしき蓮華を捧げ大鋼師親鸞合より寄進せる三十間餘の幕下を渡りて本堂に入り管長閣下の大導師にて本門醍醐の妙經を誦し皆共歸道の法水を汲みて佛陀大悲の救濟を請ひいとも儀嚴正重なる大式事の半ばに達務野日僧正の願文あり

に於て音樂天童の大儀式を擧げられしが當第六教區に在りては前月來より準備員驛つて萬般の設備に奔走せられしかば諸事整頓を告げ二十九日午後一時二十餘名の僧員は異口同音一實の妙味を捧げて國運の隆昌と大法宣揚の加被を請ひこゝに大法會開會の奉告式を了り各教區より參列の布教師は即是道場の心地に住して信念の啓發に努め聽者をして其護法の熱誠に感ぜしむるほどで夜間は特に小竹布教師の幻燈器によりて上人一代の活動的事蹟を紹介し娛樂のうちに教訓を加ふるものあつて實益の多かつたことは言ふまでもないまた本堂の石段右側に手踊茶番狂言の餘興などありて人山を築くほどの賑ひであつた次で三十日は曉の雨も十時頃には天晴れ渡りて秋の日好となつたので地方の參拜者堂に溢れ境内に群集するの盛觀を呈するに至りしは之れ則ち佛陀顯靈の御力であることゝ感じた午前十一時二十分汽車の着するや各教區代表僧員支學林生從大鋼師教總人會員はプラットホームに本多管長閣下を迎ふ一發の煙火は天に響き閣下は徐々腕車によりて會場に着せられた午後二時號鐘の合圖により四十餘名の僧員は何れも正裝を調へ到曉たる音樂の響きは人心の汚れをはらひ可愛の天童は盆栽の如き手に香ばしき蓮華を捧げ大鋼師親鸞合より寄進せる三十間餘の幕下を渡りて本堂に入り管長閣下の大導師にて本門醍醐の妙經を誦し皆共歸道の法水を汲みて佛陀大悲の救濟を請ひいとも儀嚴正重なる大式事の半ばに達務野日僧正の願文あり

故に管長閣下の祭壇を仰ぎ七里法華聯合二夜三日の大法要を修す

願はくは
妙法廣布邪法滅滅
今上陛下寶祚萬歲
國運隆昌萬民快樂
宗門繁榮亞通不退
靈願
七里法華檀信一統祖先靈菩提
現當二世所願成就
并
經下鐵道橫死之靈菩提

明治四十四年十月三十日
大法會總務僧正日主稙首

午後四時より講演會を開き三上布教師が七里法華檀信徒の奮起結合を呼びし後管長閣下は「日蓮が弟子檀那」と云へる講題を提げて登壇し僧員の氣節なく信徒の熱誠なき概して現代思潮の傾向を論じ日蓮主義發展の好機なるを說いて弟子檀那の本領責任を叙べ奮起自覺を促がして降壇せられたのは五時半であつた夫れより少時休憩僧員及總人會の見送をうけ六時發にて歸東せられしが同町總人會は終始能く熱誠を以てこの淨業を助けつゝ法燈に充ちて居ることは千葉縣には他に見ることを得ないこの堅實なる信念は倍々培養して行くことが大事であるさらに他の地方に在ては斯かる總人會を組織することに力を致さねばならぬと思ふ

同夜講演は本堂に境内に各設置を定めて多數の布教師交々相踵いて廣長舌を振ひまた幻燈により「總人兒童にまで上人の御人格の高きを傳へ日蓮主義の特色を發揮して其靈光に浴せしめ先天の靈覺を喚び起して檀徒の職分に復活せんとするものもあつた樣であるされば其布教の實蹟は著大なるものであつたことは疑がないなほ施本として鷲尾帝大史料編纂委員の「佐渡の靈蹟」二千部と佐藤海軍大佐講演の「軍人と國家と日蓮上人」一千部を一般に配與して日蓮主義勃興の大勢を傳へたのは是亦多大の効果であつたことと信ずる斯くて三日間の大法會はより多き成績を擧げて終りを告げたのであるさらに希ふ七里法華の教團が精神的大結合を行ひ日蓮主義發展の歷史に於て陸離たる光彩を放ちべく更らに一段の奮勵努力を遂げ現在の大法會をして今少しく深き意義と實力とを存在せしめなければなるまいと思ふ　（白碧生）

◎關西紀念法會

山武郡菱沼法華寺は十數年來堂宇頽廢して莊嚴を缺くものありしが今春檀家總代及有志に人心衰廢の現狀を斯かる方面に至大の關係あるを察知し檀家一同と相謀り全部の賛同を得て六月工を起すに至れり其の間工事委員は能く此事に從ひ遂に十月二十四日竣工を告げしかば十月三十一日開堂の式を擧げたり同日僧正野日日主師は招聘に應じ三上本誕記者は前住職として隆讃のため參列し午後一時野日僧正導師として十餘名の僧員と共に大法の妙味を捧げて大修繕の竣工を奉告し住職成島泰行師は式辭を述べ本寺本願寺森川僧都は祝辭を捧げ工事委員總代齊藤松治郎氏は落成の辭を賜讀して法會の式を終り一同撮影して將來の紀念となし午後三時より講演會を開き成島師

開會の辭を告げ野口僧正は教の敬禮すべき所以に就て幾多の歴史上の事例を擧げ而して教に國家を本位として個人を融合する底の忠孝爲本の教義にあるべしとて日蓮主義を鼓吹し三上師は娯樂と教訓との關係より說き起して教訓の意義を含まざる娯樂を排し精神關係を離れたる娯樂に就けるものは自治の要件を缺けるもりなりとて精神修養の講話を聽かざる風潮を慨いて懇切なる警告を與へ森川僧都は法華教と實生活の交際や自治體との關係及び日蓮主義の特長に就いて平易簡明に說かれしが故聖祖の威靈の大なるに感したるものありき餘興として相撲及人形踊等ありて人出多かりしが夜間は小竹布教師の幻燈撮影を催ふし上人一代の教訓的活動の意義を說き滿堂立錐の餘地なきを見るに至り頗る盛會を極めたり斯くて開堂の式は滯事なく終了するを得たりき

（白雲生）

東海道教報

◎久しく鳴かず飛ばざりし豐橋の國友文學士は昨今徐々として運動を開始し同地に於ける名士を勸誘して精神修養上の講演を開きつゝあるが「十月十二日」は會式逐夜なれば森嚴なる法要を修し佐藤朝倉の兩師及び國友師は感恩的法話を爲し「十三日」午後一時より朝倉師の講話に次で國友師の聖祖の遺訓に關する講話ありて三百の聽衆をして合掌唱題せしめ「十四日」青年會主催にて公開演說を開き國友師の開會の辭ありて伊藤參勝新報主筆の法華の所感を告白し豐橋第四中學教諭雨宮信頼君の人生と云へる題下に人生の眞意義を論じて宗教との交渉に及び聽者をして其所論を味識せしむるものあり「十五日」婦人會の例會講演を催ふし常盤女史と國友師の有益なる訓話あり「十八日」入院式を擧ぐ檀信徒の祝意を表して會するもの五百餘名を算し壯重嚴肅なる法要を終りたる後演說會を開き朝倉野中高橋師の講說に次で國友師は滿場の喝采に迎へられ教任の披露を爲し現代に於ける東海道の教界を統一すべき機械を示して式を閉ぢたりしが顯本宗監督布教師能仁僧正の巡教を幸機とし青年會婦人會聯合にて大講演會を開けり「二十八日」午後七時國友師は開會の辭を述べ淺川醫學士は醫學上より見たる婦人のヒステリー症を論じて精神修養に及び伊藤愚溪氏は日蓮上人と北條政府との關係を說き上人の國家主義を談じ能仁僧正は修養に於ける偉人の言行を叙べて用意と覺悟を示し「二十九日」午後一時より紀野布教師の國民鎮道滿濃に對して日蓮主義の必要を明かにし滿井文學士は己に由て言ふ者は己の榮を求むるものなりとて上人の行動を贊し秋元商業學校長は修養上有益なる意見を發表し能仁僧正は無比の國體と無上の鎮教に就いて我國體の崇高無限なると法華經の最善教なるとは共に融合して進むべき所以を說き多大の實益と趣味とを喚起し日蓮主義の發達を知らしめ前古未曾有の盛會なりしとぞげに道のために欣ぶべきことなれ

（聽聞子）

京都

◎十月二日開妙滿寺本堂に於て厳肅なる御會式を行ふ野老僧正は一大事因緣に就いて因緣譬喩を引き經文並書の聖訓により縱橫に講說せらる二百餘の參詣者何れも六百年前の往時を追憶して感泣に咽ぶものもありたりき

◎日蓮主義大講習會　京都に於ける日蓮各派協同の團體たる聖祖門下同志會と京都天晴會とは一致して上人鎭傳の講習會を開催するに決し十一月三日より七日迄寺町二條妙滿寺を會場とし講師として本多日生師武田宜明師高島平三郎君及び野口僧正佐藤海軍大佐上田文學博士新村文學博士等を招聘し上人の人格主義を發揮すべしと云ふ會は同會は三日午後一時より發會式を行ひ大演說を開き本多大僧正其他名士の講演ありて盛會を極めいかに日蓮主義が現代の要求に應ずる大德教なるかを知らしむるものありしとはこの國と道のため歡喜に堪へざる事也詳細は後報を俟つて報ぜん

神戸教信

◎神戸高等商業學校の日蓮鎭仰義會は六月二十七日午後二時より同校學生會館樓上に於て開催し、大阪より梶木日穣師の來神を乞ひ「宗教學上より見たる日蓮主義」と題し世界各宗教の概觀より宗教學者の理想せる宗教を述べ之と日蓮主義とを對比して即ち理想的成立宗教なる旨を論ぜられ終つて茶話會を催ふし交互研鑽を披瀝して修養に努めつゝあり尙ほ同會は京都講習會出席を非招して臨時大會を催ふすべしと又本月より雜誌「統一」を會員一

同に頒布して研究の資料に供すべしと云ふ

長州教報

◎萩町における朝倉侯逝師は既報の如く天晴會兒童日曜會家庭講話會等を設けて卓意布教に努力せられつゝありしが其効果見るべきものあり師また熱誠能く例會ごとに日蓮主義の卓越せる方面を組分し昨今各宗派を席捲風靡して獨舞臺の觀ありと云ふ

朽木教報

◎信仰の革新正法の宣揚を目的として設立せられたる麻木藤麻木町本化行學會は從來數次の講演會及通覽文庫を開設して會員各自の信念涵養に全力を傾注したるかこゝに天地清朗の氣に漲める餘を卜し一般公衆に對して純正日蓮主義宣布を試みむと欲し大僧正本多日生猊下文學士小林一郎先生に乞ふて十月二十八日午後五時劇場明治座に於て

國民教育　佛教實義講演會

を開催したり是より先本會幹部は來るべき大會準備として下都賀郡內各町村立小學校各青年會を始めとし當麻木町に於ける郡役所裁判所稅務署監獄署等の諸官衙並に藤都立の各中等學校及町立小學校の職員一同町會議員商業會議所員及市內有志者に對して海軍大佐小笠原子爵演『立正安國』一篇を述へたる感篤なる摂持歎み發したり殊に世に憐れなる盲人團に對しては其種に耳もてのみ慰藉を得るの不幸に同情して慇懃なる案內狀を送付し慰安を得せしむべく聽講を勸めたり又其等招待の外引札廣告辻廣告新聞廣告等殆んど公衆の注目を引くべき有ゆる手段と方法とを講じたりさ愈々待ちに待ちたる二十八日は來りぬ當日は會幹部員は早朝より事務所に集集し各自部署に從ひて會場の莊嚴に力を盡すあり講師歡迎準備に忙殺せらるゝあり秋空の定めなきを氣遣ひながらも佛天の加被力に任せつゝ欣然また悠然として法の外に會なしてう大信念の下に活動して定刻の來るを今や遲しと待ち構へたり時は刻一刻と移り時針午後一時三十分を報ずるや講師歡迎委員として當町々長を始めとして本會幹事（中には實業家弊士時議士新聞記者等）は各々腕車を驅つて停車場に馳せ向ふ場に着するやプラットホームに於て特に東京迄出迎ひ歸行せし幹事の一人に先導せられたる兩講師を迎ひ再び十數輛の腕車を連れて本會事務所に向ひたりあゝ此の聖き行列が如何に市中の人々をして目を側たゝしめたるかよ事務所の門前には國旗と會旗とを交叉して歡迎の意を表し其前には居殘れる二十餘名の幹部員各々禮裝敬虔なる態度にて兩講師を迎へ設けの一室に御案內申上げ少時休憩の上庭前に於て兩講師を中心として紀念撮影ありかくて定刻に近づけば煙火の號報は轟然として天地に震ひぬ並に會場たる明治座の光景を略述せんに先づ大通りに面して『國民教育佛教講演』の大額は暮色蒼然たる中に紅白の電燈を以て飾られ更に會場に『佛教實義講演會々場』の大堅看板は太筆に書かれて立てられ會場の前面には紅白の幔幕もて張りつめられ其入口には國旗と會旗を交叉して掲出せられたり

さて會場內の裝飾を記さんに正面は悉く祝壇を布き請ぜられ後ろは紅白の幕を張り金屏風を廻らし中央に青葉に菊花もてあしらひたる額縁にて中に『立正安國』の四大文字を書かれし大頭額然として高く懸り前には盃綾數鉢其風致を助け講壇巡記臺ヲルガンボールド等順序よく配設せられ見る人をして翻然悠然な正さしむる趣きあり場內縱橫十數間實に千有餘人を容るゝに足るべし煙火號報と共に今日の轉法輪を開かんとて數里を遠しとせずして來るもあり公衆はスヤ開會よとて我れ先にと恰も潮の寄するが如く會場さして押し寄せたり

本會は特に統一團に乞ひて陣頭したる佐藤海軍大佐逝『國家と軍人と日蓮上人』の講演錄を聽講券と引替へつゝ一人々々と入場せしめたるが定刻を過ぐる三十分用意せる千部は盡きて更に他の有合の教書を與へしも是亦皆無に歸し遂に施本は謝絕するの止むなきに至り會場は次第次第に人を以て埋められ遂には演壇の側臨下花道等隨同もなく眞に立錐の餘地なく後の調査に依れば來聽者約二千餘內入る能はずして空しく歸るもの三百を超へ當町に於ける各種講演會として空前の多數を占め社界の各階級の人士を網羅せるを以て見るも其の盛況察するに足るべし

かくて緊々として本錄は書き渡りぬ拍手の間に高田幹事謝會を宣し本多幹事「開會の辭」を述べ本化行學會が如何にして起り如何にして活動し如何にして本講演會を開くに至りたるかを略述して降壇服部幹事の紹介により講師小林先生拍手の裡に登壇「生活の價値」と題し

て快活縱横現代生活の無意義を破し教育方針の矛盾を說き進んで眞生活の趣味と快樂と慰安とに充實せるかを述べ更に之を日蓮上人に徵せんとして先の龍口巨經に際し『これ程の悦を笑ひよかし』と仰せられたるを見よとて滔々數萬言其間國刺論議を弄せられしかも寸鐵人を刺すの鋭利なる論鋒には喝采湧くが如く人皆感に打たれざるは無かりき同氏生約一時間半に亘る長廣舌を振はれて降壇五分間休憩其間蓄音機の演奏あり休憩時間を過ぐれば劉喚たる宗教音樂の後徐ろに本多大僧正は紫衣に袈金襴の裝束かゞ風丰堂々として谷村幹事の紹介によつて登壇滿場寂として聲なし祝下は壯重なる態度と謹嚴なる口調とを以て『現代思潮と日蓮主義』と題せられ先づ現代の二邪想なりとして淺薄なる現實主義と愚味なる懶疑思想を破折せられ是が救濟策としては我國固有の惟神の道即ちマコトなり之雷道にて明德とも天道ともいふとて先づ神儒二道より說き起され進んで之を佛道に攝し更に轉じてこの天地正大の氣が如何に吾人の實生活に光明あらしめたるかは日蓮上人によつて知るを得べしとして上人が眼睛に選び王ふ每に大なる希望に滿ちさせ給へたるを說き在佐島身延御開居の御有樣に說き及ぼさせられたるが其の間富豪教育家爲政家法律家宗教家等の廳散墮落を指摘せられ實に痛快を極め約二時間の講演に亘りたるが場內一人として喧騷の態度に出づるものなく肅然として敬聽せりかくて再び宗歌奏樂の裡降壇せらる平岩幹事は起て謝辭を述べ閉會を宣しぬ時に午後十時。

斯くの如くにして講演會は無事終了甚深なる感化を聽衆に與へ非常なる效功ありしを佛天に感謝し奉るの光榮を得たり

因に記す本講演會に關し特に盡力せられたる諸氏は左の如し（イロハ順）

飯田　幸（新聞記者）　服部新五郎（糸繰商）
服部寡久藏（銀行員）　本多傳作（眼科病院長）
大塚金兵衛（銀行頭取）　太田彌太郎（呉服商）
大塚恒十郎（魚問屋）　大須賀仁作（酒　商）
渡邊　宇吉（鐵　工）　高田　安平（藥種商）
田村金五郎（荒物商）　高田　久治（藥種商）
田代　善平（貫　商）　高橋　正平（古物商）
谷村　五郎（銀行員）　塚原　保六（辯護士）
中田　源六（雜貨商）　上原信次郎（紙　商）
野口　兵藏（荒物商）　松下喜一郎（生糸商）
天海彦四郎（材木商）　新井　要藏（水車業）
篠崎儀右衛門（金物商）　鐘山　政藏（菓子商）
平岩平八郎（料理業）　望月磯平（栃木町長）
鈴木常三郎（銀行員）　大野サト子
高田ミチ子　茂木フミ子　平岩シカ子

並に特筆すべきは摺持せれた中の盲人團は骨て斯の如き會合に接したる事なりしかばこの甚深微妙の法雨に浴して其悅び言はん方なく加之本會婦人部の諸姉が手を引き歩を扶くるの親切懇到なる介抱に接し其の感情に對しては嘖々謝辭をたゞす中には感涙に袂をしぼる者もありしとぞ。

⑥ 青森教信

左の一篇は青森地團會より本誌の第貳百號發刊を祝ふて寄せられたるもの道の爲護で誠意を表す本誌は紀念號發刊の計畫ありしも目下洋式にて統一會堂建設中にして編輯者は工事監督に從事し多忙なるため紀念號發刊を停止し會堂落成の上大に誌面の革新をも行ふべき希望也（編輯部）

慶而統一貳百號の發刊を奉祝候回顧すれば明治二十九年時代の要求と宗門の大發展とは期せずして我が統一團の成立となり亟爾雜誌統一の發行となり先づ前陣の血祭として當時佛教各宗教協會なる權門妖僧の謬說を見事瓦解せしめ大谷光尊を始めとし權門の諸龍象をして其心膽を寒からしめ爾來十有六年一日の如く統一主義の法幢高く常に剛健の論鋒壯の筆克く日蓮の大主義を擁揭し並に第貳百號の刊行に至る歡喜亦何者か比せん今正是其時天下の思潮當並に蒐り東京天晴會を始めとし各地の天晴會亦地明會隆續として現はれ霧然として起る近時日蓮の主義を奉ずるの徒に非ずんば有も國家を論じ人生を議するの器にあらざるを想はしむ嘻幸慶何事か過ぎん謹で貳百號の發行を祝し地上祝福の爲め悠久の大發展奉祈候

時代必然の要求として又吾人信念の片影として東北青森の地に日蓮主義を聲明したる吾青森地明會は創立並に三星霜を閱し申候近時活動の一班左に御報導致候

一、七月第二日曜日會員奈良園茂君の發願により東津輕郡横內村に講演會を開く會するもの村の有力者官公吏等にして

時代の趨勢と日蓮主義　西　尊藏君

日蓮聖人の人格　中村　謙藏君

なる題下に滔々雄辯を揮ひ大に日蓮主義の鼓吹に勞め救益多大即時入會者も出で會長岡の

期を俟つて再演の申出有之候

一、八月十三日に本會創立第三回記念日に相當しければ青森市外沖館阿部秀三君宅碧波藩を打つの浮舟に記念會を擧け終つて祝宴を相饗ふし候是より先き會員武田禮吉は公用を帶び北越地方を巡回し寺泊の靈蹟を訪れ歸青せられし事とて左の講演會を開き申候

寺泊御書を拜して　中村　謙藏君

日蓮聖人寺泊事蹟考　武田　禮吉君

中村君は寺泊御書に顯れたる聖人の道讖を叙し北海浪荒き佐渡島圓顯の日を卜して本化上行自覺の曙光を顯されたるを論及し武田君は身親しく北聖境に蒞み六百年前龍口の巨危を免れて北海雪深き佐渡の渡りを挨ち聖體一旬を息ひ給ひし聖蹟法福寺及び寺泊御書作製玉ひし石井吉廣の屋敷跡等の光景を目君の親密なる調査と犀利なる觀察を吐露し延て北越現時の教況一班に及し苟も日蓮主義を奉するもの一日も安如たらざるべきを慨し聽衆をして親しく此聖境を拜するの想あらしむ尙其蒐集し來りし者材料を開覽せしめ寺泊の聖蹟は遺憾無く紹介せられ候武田君は愛媛の生れ長崎高商を出で目下青森大林區署木材販賣部の要路を司る溫厚なる經濟學者先に基督の主義より轉して日蓮聖人崇敬者と爲りし人氏が明晰なる頭腦に擊々として聖人揚仰の歩を進む將來の發途期して俟べきのみ右終つて滿期役員の改選あり左記諸氏當選祝宴に移り各自胸襟を開きて今後大に主義發揚に努力すべきを誓ひ點燈時た過ぎ萬歲聲裡散會を告げ申候

幹事五名　中村　謙藏　阿部　秀三
有路虎一郎　武田　禮吉

一方井尭爾　會計係石村義和

一九月三日會員奈良園茂君の任官榮轉の送別を兼れ中村謙藏君宅に例會を開き

佛教の大綱　中村　謙藏君

統一主義とは何ぞや　阿部　秀三君

各廣長舌を揮ひ終りに奈良君の謝辭あり茶菓の饗應ありて散會を告げ申候

一日持上人の靈蹟探險　世人も知る如く大聖の御直弟蓮華阿闍梨日持上人は一天四海皆歸妙の題目を實現せん爲永仁三年正月元日孤林長然異域に化を布くべく鳥里遠征の途に上られたる壯擧は實に我邦佛教史上特筆大書すべき事蹟にして其本洲名殘の紀念として路傍の大石に玄題を書し玉へし遺蹟法峠を探險すべく九月三十日遠足を試み申候突嗟の計畫に來り會するもの阿部武田中村西石村一方井小澤の七氏小澤屋三郎君は其勤養地の近き縁を以て東道の勞を取り天高く氣清き好時節津輕の平野を橫に見て十月一日寺に詣れば山主千葉教善氏大に吾曹の行を喜び歡待致され候寺に寶塔山法華院と號し南津輕郡六郷村十川に屬し往古の奥洲街道にして鬼神お松の住みしと傳へらるゝ笠松峠の附近にあり十川部落を距る一里半路傍丈餘の巨巖其南面に屬平約七尺位の處幽かに玄題七字の刻痕を認めらるる即ち今を距る六百十七年前海外布教の雄圖を起し莊嚴を分け此地を過らるゝに際し脚下怒濤の澎湃たるを望み嗚呼日本靈國の北端是より向ふ蝦夷雄壯我息の根の續かん限り妙法宣傳の浮願を爽ふせん最後の紀念として皆め玉へし修讀なり西岩木の津輕富士と相對峙し幡現崎を望み遙に酒鐘の風を迎ふる處津輕五郡の平野一眺にあり萬頃の稻田秋風颯として千巻の波を作り雄大の氣宇乾坤を呑み轉た六百年の昔を偲ばれ感慨無限暫時誦經唱題報恩の微思を捧へ申候可惜持參の偉風今に傳ほらず靈蹟從らに迷信狐狸の跋跳する處と爲れるは慨嘆の極と存候近時創立せられたる聖蹟靈蹟保存會の事業としても適當の方法を請し度ものとの感禁せざるもの有之候此靈蹟に近く安人入內の二部落あり上人故あり共に日持上人の遺蹟の一たるべく此地を距る西二里奥羽線に當る大釋迦驛は是れ小乘無門の小釋迦を排し眞本法華の大釋迦を顯揚せられたる遺稱にあらざるなきか又南五里にして大鰐村岡園梨山は阿闍梨山の說傳にあらざるか然も其山上一千坊計劃の遺蹟ありと傳へらるゝに以て見れば益〻持參教化の跡にあらざる無きかを想はる唯文獻の證すべき無きを惜む日宗史上考古學者の一考を乞ひ度事に候山主の發起により（現時寺は此靈蹟距る約一里下方に移轉せり）傳來の寶物を拜まるに文化年中白河樂翁より贈られし扁額東奥戒壇の四大字は稀に見る雄源の筆其裏面に文化十三年五月四日　從四位下源定信書とあり墨石妙經寺日宣師より樂翁公歸道の師範たりし承野左內爲長を介し題額を乞たる旨日宣及水野左內の附文あり共に珍とするに足るべし其他特に紹介すべき程の者見當らず候會探險すべき此處從雄秋の日足の短ければ疲き

ぬ名殘を後にして夜昏時滿車に搭じし一同歸途に就き申候

以上小生等東北極地日蓮主義鼓吹に努むべく活動の一端を報導し剛筆致し候

目下正會員左記の通りに有之候終りに臨み累れて統一誌貳百號の發刊を祝し時代の要求に應じ倍々發展あらんことを奉祈候（米峯生報告）

會員　氏名　　いろは順

一方井堯爾　岩手　　石村義和　青森
幾部　誠一　愛知　　西　專藏　山形
新沼　彦吉　岩手　　豐巻以直　岩手
（モ大正六年）岡田　十藏　山口　　小野寺修治岩手
小澤眞三郎　宮城　　柏木吾市神奈川
武田　禮吉　愛媛　　高橋松兵衛岩手
奈良　國茂　青森　　中村謙藏　岩手
登坂　龍郎　山形　　工藤昌逸　青森
（明七七年）安濱　榮藏　熊本　　今　兵吉　青森
小林　慶吉　青森　　小畑　信　東京
（明七六年）阿部　秀三　岩手　　有路虎一郎宮城
荒川　眞文　山形　　佐藤忠左衛門青森
櫻庭　操　青森　　木村善太　青森
目時　政忠　岩手　　白鳥康八　青森
尾谷源治郎　大阪　　海老名彦八青森
（明七七年）遠藤　直俊北海道　　廣住精藏壽老茨城
（明七八年）關谷　司　青森

監督布教日誌

隨行員　金光孝碩誌

現代に於ける思想の危機を救治するものは立正安國を主義として根底に力を與ふるものにあらざれば拿重するに足らざるは既に識者の認むる所なり而して日蓮主義はこの缺陷を補ふて根底より改造の鐵力を與ふるもの也故に各地に於てこの主義のもとに結合し運動するものを出だし翌日東天の勢を以て天下に迎へらるゝに至れり我教團さきに監督布教の制を布き各地方に派して信仰の趨向を調査して純正の信仰を鼓吹しつゝありこのたび巡教中の北陸方面は少しく別號に報せしも月餘に亘れる巡教の狀況を簡單に摘記せん

九月六日福井市妙經寺に於て晝夜二回の講演會を開き三百餘の聽衆は熱心に傾聽したり

「七日」市外山内本行寺にて說教を修し法雨を布けるを覺ゆ「八日」朝渡邊爲佚氏宅にて家運長久の法味を捧げて南居妙正寺に向ふ二回の講話法華を說りて正しき信仰に活きよと勸む

「九日」高木信行寺にて說教演說を行ひ日蓮主義の靈光を拜せしむるものあり「十日」今庄善勝寺に夜會法話を開きて善男善女を啓發し無限の活力を與へて北越布教の終を告げ「十一日」今庄より敦賀に出で丹後街道に車を驅りて小濱本行寺に至る「十二日」說教會を修行し二百餘の聽衆をして湧仰の念を起さしむ本行寺は僅かに七戸の檀家あるのみなるも寺門の莊嚴美觀を極むるものありて敬服に價すと云ふべし「十三日」小濱より汽船に乘じて和田に着き新舞鶴より汽車の客となりて丹波國綾部に到る夜間了圓寺に於て大演說會を開き大法鼓を鳴らしければ野狐禪僧の質問反對なども手答へはなかりき「十四日」上田新兵衛氏の新宅落成祈念法要に招待せられまた同夜純信者のために法話を開き道の拿き所以を講たり

「十五日」遠敗氏の招待をうけ種々の供養を味ひつゝ法門を語りたりき「十六日」園部大乘寺に法輪を轉じ「十七日」は亀岡在の禪宗の地に於て予の信徒たる寺町晴之助河合熊吉の改宗者は此奉義を利して寺町宅にて講演會を開きしが廣長舌を出だして法益を布けり「二十日」耳原法華寺に於て敎の敬重すべき所以を說いて上人の大なるを知らしむこの夜有志の會合に依て青年會組織の議成る「二十一日」日敎會發會の式を擧げ悲篤なる敎示を卒へ大阪に向ふ逗成寺にて熱烈の辯論を振つて日蓮主義の特長を縷分せり「二十二日」堂園寺に法要を行ひたる後上人の御人格及信仰の存否を論じて人生の眞義を講ゆ「二十三日」千前同寺歷代相馬小馬三氏の特招により法要を行ふ同家を辭して堺妙滿寺に着す高木師の護法の熱誠は諸般の準備能く整ふて講師の氣宿を萬丈ならしめたり「二十四日」法王寺の觀察を終り京都本山に歸りしが同日は本山にて講演會を開き天晴朗なるも潮濱高く登は平和の如くなるも思想界の潮濱つれに澎湃として結を覆さんとするの勢あるを說きて滿堂の聽衆に警告を與へ「二十六日」久遠寺に於て法華色讀の日蓮上人を論じて現代の模範者なるを述べ委曲沈潛の人心に清涼劑を與へたるの觀ありき斯して茲に巡敎を終りたるも各地における講演が能く聽衆に徹底して日蓮主義の貴きを覺らしむるものありしは是れ確に未曾有殿の佛事の然らしむる所なりと信じさらに一段の信行を強めて佛使の天分に擔るべきを自覺せり予は茲に各地方信徒の堅實なる信仰を持してこの主義のために外護の本領に盡力せらるゝを望むこと切也

敎學財團基金現金受領報告

●第四拾回　明治四十四年九月三十日迄到着分

金壹圓(四)　千葉縣模神房眞福寺住職齋藤義盛
金貳圓(三)　右同寺檀家中
金貳拾錢(完)　同縣草刈行光寺住職横山會章
金貳拾錢(四)　同縣溢谷行光住住職
金參拾五圓(皆)新潟縣高田顯本寺住森川秀光
金六拾錢(完)　京都市大慈院檀家　田中はる
金貳拾錢(完)　東京駒込顯本寺住職山崎日曉
金貳圓(完)　右同寺檀家　小原　邦壓
金五圓(五)　同　小泉藤三郎
金貳拾錢(九)　牛込久成寺住職　田井　日晃
金貳拾錢(九)　右同寺　檀家中
金參圓(完)　兵庫縣妙信寺住職　高田　日輔
金拾錢(完)　京都妙祐寺兼住　坪永　日監
金拾貳錢(三)東京品川清光院住　伊保内敎精
金四錢(三)　右同寺檀家　加藤　春吉
金七圓(完)　靜岡縣吉美寶仙坊住　野中　通立
金五圓(六)　神奈川縣大豆戸　本　乘寺
金貳拾錢(四)東京淺草圓常寺檀　清水佐太郎
金貳圓(二)　同　鈴木　もと
金拾錢(一)千葉縣流庭元福寺住職　齋藤海叔
金拾貳錢(一)　同縣同寺檀家　石橋　彌
金四錢(一)　同　石川　賦
金拾八錢(完)京都府知見谷本妙寺　檀家中
金壹百圓　堺市仲之町東二丁　村上篤三郎

●千葉縣柴石名蓮華寺寺檀

金參圓宛　住職資藤義盛　同人（爲直實院著提）井桁モト　内藤セイ　拾五圓也
同寺檀家中　（以上第四回）

同縣長谷川正覺寺々檀

金貳圓　住職廣部玄蓮　壹圓五拾錢宛　田邊治助　並木庄助　並木國松　唐鎌熊吉　駒貞壹圓宛　田邊長松　駒三之助　駒林松　駒金助　五拾錢宛　駒春吉　鈴木善次郎　並木彌一郎　田邊與惣松　貳拾五錢宛　田邊ろく　鹽谷吉藏　田邊石松　駒源之助（以上完納）

靜岡縣見付玄妙寺檀家

金四拾錢宛　地岡治作　吉岡吉十　大塚貞吉（以上五回完納）　吉岡吉十　日中鎗三郎　藤澤鎗太郎（以上第四回）　藤澤與平（第三回）

千葉縣關本法寺寺檀

金貳拾錢　住職森川會段　貳圓宛　河野祥吉
三橋むめ　金壹圓貳拾錢　御園恒太郎　金壹圓宛　大多和良八　渡邊主計　長島慶三郎
田邊金之助　細谷彌吉　細谷桑之助　向七十郎　大多和ます　大多和淺次郎　坂倉字之助
金八拾錢　阿曾和助　六拾錢宛　古山惣五郎
田邊賢司　田邊定一郎　字島惣平　齋藤四郎
金五拾錢宛　田邊新左衛門　高山藤三郎　四拾錢宛　大多和鎗藏　河野はつ　野口源之助
北田文藏　峰島映助　鶴岡源七郎　田邊秀三郎　小高伊治郎　木島健治郎　綠川三吉　大塚千代吉　參拾錢宛　大多和利助　安藤初太郎　北田藤右衛門　片岡五郎右衛門　大塚瀧次郎　金四圓參拾錢　坂倉爲次郎外二十七名（第三回）

岡山縣吉ヶ原本經寺檀家

金拾圓　鳥越點一　金九圓宛　柴原盛太　森芳雄　金拾圓　木村和吉（以上完納）

京都府園部大乘寺檀家

金壹圓六拾錢　德田勝任　同休太郎　小島信吉　金壹圓宛　田中吉兵衛　田中彌吉　金參拾錢宛　田中熊次郎　同虎吉　金八拾錢　同岩治郎外三名（以上第五回完納）

千葉縣本小與蓮成寺寺檀

金拾圓　住職齋藤自正　金壹圓五拾錢　深山清次郎　金壹圓宛　藤乘貞助　小川てい　森川彌吉　森川竹五郎　大野伊藏　御須定之助　八拾錢　御須定吉　六拾錢宛　大野作藏　石井武吉　地引嘉四郎　深山惠十郎　白井林藏　田中才吉　小川彦太郎　原田誠　藤乘和助　高橋美明　松本佐吉　五拾錢宛　松本音八　藤乘初太郎　石井彌三郎　小川藤吉　小川道之助　古山鶴助　藤乘萬吉　四拾錢宛　藤乘治郎吉　日色友治　御須治助　石井定吉　八木重秋　小川仁作　鵜澤倉藏　朽木福六　參拾五錢　白井兵一郎　參拾錢宛　藤乘吉兵衛　鈴田岩藏　大野清次郎　深山勘太郎　今井淺吉　松本愛之助　藤乘英吉　金七圓五拾錢　大野清吉外四十一名（以上第三、四回）

同縣一ノ袋延命寺檀家

金貳圓半　佐瀨惣作　貳圓宛　中村八一郎　吉原熊五郎　飯高常太郎　吉原徹郎　壹圓五拾錢　吉原静太郎　壹圓宛　田中吉左衛門　佐瀨己之吉　佐瀨三藏　吉原彌三郎　熊澤定

吉　熊澤彌惣次　五拾錢宛　中村五郎吉　熊澤三次郎　内山久左衛門　關藤松　貳拾錢
中村平作第（一、二回）

●大阪市堂闕寺檀家

金貳拾圓宛　相馬小馬三　杉田平治郎　拾七圓　濱中安次郎　五圓　井上重治郎　四圓　川口常吉　住職吉谷簽眞　貳圓　川口トヨ
（第四回）

訂正　第三十五回報告中金參圓片岡義憐は金六圓同人の誤に付訂正す

會津妙法寺本堂再建寄附
金領收報告（第七回）

金貳圓　皆納　二回　伊保内敎精
金六圓　皆納　六回　吉田日宣
金拾圓　一回　鈴木日雄
金參圓　三回　金坂義昌
金拾五圓　皆納　三回　山根日東
金貳圓五拾錢　同　同　川崎泰秀
金貳圓五拾錢　同　四回　吉田義着
金五圓　同　二回　前田日眞
金五圓五拾錢　二回　岩崎會眞
金壹圓　皆納　千葉　布留川平吉
金五圓　二回　秋葉日虔
金貳圓參拾錢　一回　渡邊乾航
金七拾錢　皆納　四回　吉富叡叔
金四拾五錢　三回　同人
金貳圓參拾錢　第二回　河野見中
金壹圓五拾錢　皆納第四回　山本日萱
金四圓貳拾錢　第三回　遠谷行光寺

金八圓　第二、三回　土屋眞容
金壹圓八拾錢　皆納　澤井通穆
金六拾八錢　同　觀行寺
金六拾八錢　同　本城坊
金六拾八錢　同　圓實坊
金拾圓　第二回　伊藤實樹
金貳圓　同　鷹部乾山
金五圓　皆納第回　西村會立
金五圓　第二回　板垣日柬
金壹圓六拾錢　同　小竹俊雄
金壹圓　同　渡邊支雅
金五拾錢　第一回　北田知一
金五圓　第三回　松井道安
金拾圓　第一回　池澤暁支
金貳圓貳拾八錢　皆納第一回　鈴木正二
金壹圓　第一回　矢田智光
金六圓　皆納第二、三回　蒔田圓壽
金參圓　第一、二回　鵜澤暁運
金拾五圓　第一回　森川寛行
金五圓　同　横山會章
金壹圓四拾錢　皆納第一回　正覺寺
金壹圓　同　山本博濟
金拾五圓厘　第一回　前田日隆
金貳圓　同　日暮支靜
金壹圓五拾錢　皆納第二回　赤地光精
金五圓　第一回　渡邊元敎
金拾圓　皆納第二回　中田量叔
金五圓　皆納第一回　鈴木乾徽
金拾圓　第一回　高橋遵穎
金五圓　皆納第一回　妙本寺
金貳拾五圓　皆納第二回　白井日慶
金拾圓　第一回　越境寺
金拾圓　第一回　岡本圓正

金參圓　皆納第一回　田上寛靜
金壹圓五拾錢　同第二回　鑑井乾升
金壹圓五拾錢　同　同　鈴木孝阿
金五拾錢　皆納第一回　妙泉寺
金五拾錢　皆納第一回　實敎院
金參圓　同　同　證量院
金五圓　同　同　精權開章
金參百圓　同第二回　田上寛靜
金貳圓　同第一回　市橋龜藏
金壹圓　第三回　中村明法
西
金五拾圓　皆納　加藤智明
金貳拾五圓　第一回　京都　西村治兵衞
金拾圓　同　同　村吉右衞門
金五圓　同　同　秋山覺治郎
金五圓　同　同　長島鄕一郎
金五圓　同　同　吉川平兵衞
金五圓　同　同　富賀榮七
金壹圓　同　同　秋山嘉兵衞
金壹圓　同　同　吉田ツル
金壹圓　同　同　西山定七
金拾壹圓　同　同　森口靜助
金壹圓　同　同　中島定助
金壹圓　同　同　遷川儀助
金壹圓　同　同　中村藤兵衞
金壹圓　同　同　森喜兵衞
金壹圓　同　同　高田定治郎
金壹圓　同　同　橋本藤七
金壹圓　同　同　村上源助
川
金壹圓　同　同　条井九兵衞
金壹圓　同　同　原林牛兵衞
金壹圓　同　同　小林勇助
金壹圓　同　同　木村留七
金壹圓　同　同　原田太七
金壹圓　皆納　同　長瀬常七
金參圓　同　同　野村耕造
金參圓　同　同　米田善治郎
金壹圓　同第二回　同　遠津ステ
金參圓　同　同　木崎音吉
金參圓　同　同　龜井半七
金參圓　同　同　峰谷明晴
金參圓　同　同　池田治兵衞
金參圓　同　同　乙葉俊大郎
金參圓　同　同　大筱善五郎

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候

正價附　三法堂佛具發賣目録　小包僅例附（郵券四錢）

佛具と唱すれば此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄を作製致置候に付御入用の諸君は。郵券四錢御送附下候はゞ早速御送附可仕候。此の目錄を御覧あれば。寺院樣方の御入用品一切の買物は何程遠方でも居ながら買物安價にでき升。早く取よせ御覧あれ其の正價附の品は左の通り

注意

●佛壇一具●過去帳の類●大般若經●一切藏經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●鏡鈸●香爐●珠數●大傘●子●中啓●雲版●錫杖●引磬●打敷●經机●盤子●人天蓋●幢幡●鬼幡●盛物臺●高坏●茶湯器●菓子盆●花瓶●三寶●繪像●木像●經卓●香合●香具類●板●御賣物坐ながら自由自在

●佛具卸部　京都市三條通小橋西入　本舗　三法堂藤田總次
特電話二千七百八拾三番　振替貯金番號　大阪一四二五九　東京一二〇七一

●小賣部　同市三條通大橋西入　三法堂佛具陳列場

法華經講演集　第一輯　金五十錢　郵税　金四錢

橘香集　特製　金六十錢　並製　金二十錢　郵税　金二錢

勤行作法　一部　金五錢　郵税　金二錢

謹白

故白鳥闍安師葬儀の際は鄭重なる御弔辭を辱ふし玆に謹で謹謝候也

明治四十四年十一月十五日

千葉縣本納町蓮福寺
井法緣一同

毎月一回十五日發行、一部金六錢　郵税五厘　一ヶ年前金六拾五錢　郵税六錢　代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ此場合ハ諸料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十四年十一月十五日印刷發行

發行人　井村日成　編輯人　山根日東　印刷人　鈴木日雄

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團

統一

第二百二號

日蓮主義の特色　女子大學講師　高島平三郎君

我國に於ける女性の地位と日蓮主義　海軍大佐　佐藤鐵太郎君

穢多に就て　吉田堅晴君

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治四十四年十一月十五日發行統一第二百一號（毎月一回十五日）

（東京　三協印刷株式會社印刷）